

## 馬 作 り 遺 跡

—県営担い手育成基盤整備事業(今泉地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2 0 1 2

新潟県魚沼市教育委員会

# 馬 作 り 遺 跡

—県営担い手育成基盤整備事業(今泉地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2 0 1 2

新潟県魚沼市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、新潟県魚沼市今泉字馬作り1723番地2ほかに所在する馬作り遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県営圃場整備事業に伴い、新潟県教育庁文化行政課から指導を頂き、魚沼市教育委員会が新潟県魚沼地域振興局農業振興部(旧新潟県小出農地事務所)及び魚沼市役所農林課の協力を得て実施した。
3. 確認調査、発掘調査ならびに出土品整理作業の期間は次のとおりである。  
確認調査 2007年11月7～14日、2009年10月13～31日、11月13日  
発掘調査 2010年6月1日～9月3日  
整理作業 2010年6月1日～2011年3月11日、2011年6月22日～2012年3月9日
4. 遺跡発掘調査の組織は、次のとおりである。

<確認調査(平成19年度)>

調査主体 魚沼市教育委員会 教育長 町田 昌  
事務局 魚沼市教育委員会生涯学習課 課長 星 雅美 文化財係長 梅川 勝史  
調査担当 高木 公輔 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 主事  
調査作業員 魚沼地域シルバー人材センター  
整理作業員 穴沢 忍 鈴木美香子 津端 郁子 渡辺 亮子

<確認調査(平成21年度)>

調査主体 魚沼市教育委員会 教育長 松原 道子  
事務局 魚沼市教育委員会生涯学習室 室長 渡辺 金作  
調査担当 高木 公輔 魚沼市教育委員会生涯学習室文化財班 主任  
調査作業員 石塚 久吉 大屋喜代志 貝瀬 亮子 金沢 幹雄 山本健太  
整理作業員 穴沢 忍 鈴木美香子 武藤 智子 山本 健太

<発掘調査(平成22年度)>

調査主体 魚沼市教育委員会 教育長 松原 道子  
事務局 魚沼市教育委員会生涯学習室 室長 柳沢 武士  
調査担当 梅川 勝史 魚沼市教育委員会生涯学習室文化財班 副参事  
調査作業員 石塚 久吉 今村 朱 金沢 幹雄 桑原 千秋 櫻井 佑紀 佐藤 一真  
佐藤 光美 佐藤 要一 佐藤美恵子 高橋 共一 登坂 健尚 平井 猛夫  
武藤 結邦  
整理作業員 穴沢 忍 今村 朱 大桃 好子 斎藤 真弓 鈴木美香子 武藤 智子  
山本 健太

<整理作業(平成23年度)>

調査主体 魚沼市教育委員会 教育長 松原 道子  
事務局 魚沼市教育委員会生涯学習室 室長 柳沢 武士  
整理担当 高木 公輔 魚沼市教育委員会生涯学習室文化財班 主任  
整理作業員 桑原 健 今村 朱 桑原真由美 鈴木美香子 武藤 智子

5. 出土遺物と発掘調査に関する図面・写真記録等は、すべて魚沼市教育委員会が保管している。
6. 整理作業（遺物の実測図・トレース等）は株式会社吉田建設が業務を受託した。
7. 本書の執筆・編集は、高木公輔・桑原 健・伊藤正志が行い、高木が第Ⅰ～Ⅲ章、桑原健が第Ⅳ章、Ⅵ章2、伊藤が第V章、Ⅵ章1をそれぞれ担当した。遺構図トレースは、高木、桑原健が行った。
8. 図版中の方位は、特に示さない限り、真上が北である。
9. 発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の皆様及び機関からご指導とご協力をいただいた。ここに記して御礼申し上げる。（敬称略）

石原 正敏 小田由美子 春日 真実 笠井 洋祐 佐藤 雅一 佐藤 信之  
鈴木 俊成 山本 詔一 新潟県教育庁文化行政課 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
新潟県魚沼地域振興局 株吉田建設

## 目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
古代 中世	
第Ⅲ章 馬作り遺跡の概要	4
1 試掘・確認調査	4
2 発掘調査	5
a) 調査経過と方法	5
b) 基本土層	6
第Ⅳ章 遺構	7
1 概要	7
2 遺構各説	7
A 壕穴建物	7
B 掘建柱建物	7
C 土坑・ピット	8
D 構	8
E 畝状遺構	8
F 性格不明遺構	9
第Ⅴ章 遺物	10
1 概要	10
2 土器	10
A 記述の方法	10

B 分類 .....	10
1 須恵器 .....	10
2 土師器 .....	11
3 黒色土器 .....	11
3 遺物各説 .....	11
1 遺構出土遺物 .....	11
2 包含層出土遺物 .....	14
第VI章　まとめ .....	16
1 遺物について .....	16
2 馬作り遺跡における集落構成 .....	16
要 約 .....	18
引用・参考文献 .....	19
報告書抄録 .....	

### 表 目 次

第1表 機能別構成比率.....	17
第2表 遺構観察表.....	20
第3表 遺物観察表.....	21

### 挿 図

第1図 馬作り遺跡の位置.....	1
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	3
第3図 確認調査トレンチ位置図及び出土遺物 .....	4
第4図 グリッド設定図.....	5
第5図 基本土層.....	6
第6図 須恵器・土師器重量別分布図.....	6
第7図 器種分類図.....	12
第8図 機能別・食器具の器種構成比率.....	17
第9図 器高・口径グラフ.....	17

### 図 版

図版1 遺構全体配置図1 .....	25
図版2 遺構全体配置図2 .....	27
図版3 遺構分割図・断面図1 .....	28
図版4 遺構分割図・断面図2 .....	29

図版5 遺構個別図1 (S101) .....	30
図版6 遺構個別図2 (SB01・SB02) .....	31
図版7 遺構個別図3 (SB03・SK01) .....	32
図版8 遺構個別図4 (SK02・04・06) .....	33
図版9 遺構個別図5 (SP・SX01) .....	34
図版10 遺構個別図6 (SX02・03) .....	35
図版11 遺構個別図7 (SX04・05) .....	36
図版12 遺物実測図1 (SI・SB出土) .....	37
図版13 遺物実測図2 (SI・SB出土) .....	38
図版14 遺物実測図3 (SX・SP出土) .....	39
図版15 遺物実測図4 (SX・SP出土) .....	40
図版16・17 遺物実測図5・6(包含層出土) .....	41・42

### 写真図版

図版18 馬作り遺跡とその周辺 .....	43
図版19 着手前・作業状況・基本層序 .....	44
図版20 調査区完掘写真 .....	45
図版21 S101検出・完掘 .....	46
図版22 SB01完掘状況 .....	47
図版23 SB02・03、SX01・02検出 .....	48
図版24 SX03・05、河川跡・拡張部完掘 .....	49
図版25 遺物写真1 (SI・SB・SX) .....	50
図版26 遺物写真2 (SX・SP・包含層) .....	51
図版27 遺物写真3 (包含層) .....	52

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

魚沼市広神地区では、水稻耕作の合理化・近代化を図るため、平成23年4月現在3地区で県営圃場整備事業を実施している。今泉地区では魚沼地域振興局農業振興部（旧小出農地事務所、以下農業振興部）による県営担い手育成基盤整備事業が平成13年度に事業採択され、平成16年度以降から随時面工事に入る工程となった。本遺跡部分については平成21年度頃から本工事着手が予定された。

平成12年9月5日に、農業振興部・広神村産業課（現魚沼市農林課）・広神村教育委員会（現魚沼市教育委員会。以下、市教委）の三者で、工事前の埋蔵文化財調査に関する事前協議が行われた。計画地内には周知の遺跡はないが、新保家の浦遺跡や覚屋遺跡など古代の遺跡が多く所在する。未周知の遺跡が発見される可能性があり、事前に分布調査及び試掘調査が必要との判断を示し、試掘の結果に基づき再協議することで合意した。

平成15～17年度にかけて工事対象地に対し分布調査を行う。平成18年10月に、前年度の分布調査の結果に基づき試掘調査を行ったが、遺構は検出されなかった。調査地の周辺を踏査すると土水路から一定量の遺物が採取された。平成19年5月に改めて分布調査を行った。字馬作り・字石曾根地内で平安期の遺物が多く表採できた。計画では遺跡の一部は切土されるため、9月に市教委と農業振興部二者協議を行った。協議は試掘調査の結果に基づき遺跡周辺の設計変更し、盛土保存することで合意した。11月に試掘調査した結果、遺構・遺物が発見され、盛土保存される方向で調整を図った。その後、遺跡部分の設計変更が不可能なことから、平成20年5月に協議を再開した。平成21年10月に確認調査を実施して調査範囲・遺物量等を把握し、その取り扱いについて平成21年11月下旬に二者協議した。協議の結果、破壊の免れない約1500m<sup>2</sup>について本調査することになった。また、平成21年12月上旬に発掘調査計画書を提示し、調査体制として市教委が主体となって調査を実施すること、調査経費は、事業者で負担すること、平成22年の夏までに現場での作業を終了することで両者合意した。

平成22年5月14日に事業主体の農業振興部（新潟県）との発掘調査費負担契約を締結し、発掘調査は6月1日から9月3日まで行なった。遺構と遺物量から換算し発掘調査報告書の刊行は平成23年度に行なうこととした。



第1図 馬作り遺跡の位置 (S=1/5000)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

馬作り遺跡が所在する魚沼市は新潟県の南東部に位置し、北は福島県只見町・長岡市（旧山古志村）、東は福島県桧枝岐村や群馬県水上町、南は南魚沼市、西は長岡市川口地区（旧北魚沼郡川口町）、十日町市と接する。旧北魚沼郡にあたり、平成16年11月に、旧川口町を除く近隣の6町村が合併して「魚沼市」となった。

旧広神村周辺の地形を概観すると、北北東から南南西に軸をもつ新発田一小出構造線と呼ばれる大断層により特徴づけられ、この構造線を境にして東に越後山脈、西に魚沼丘陵が南北に走る。六日町盆地を北流する魚野川と磐越国境に源を発する破間川が南と北から直線的に流れる。両河川は小出島で合流し、流れを西に変え、魚沼丘陵の間を通過し北魚沼郡川口町で信濃川に合流する。魚野川・破間川とその2つの河川に合流する小河川より約10段の河岸段丘が両岸に発達し、沖積地・自然堤防が中島・新保・今泉付近に形成され、多くの遺跡が分布する。本遺跡のある地域は、破間川により形成された低地（破間川低地）に立地する。本遺跡は標高約102mに立地し、現破間川河床との比高差は約4.0mを測る。

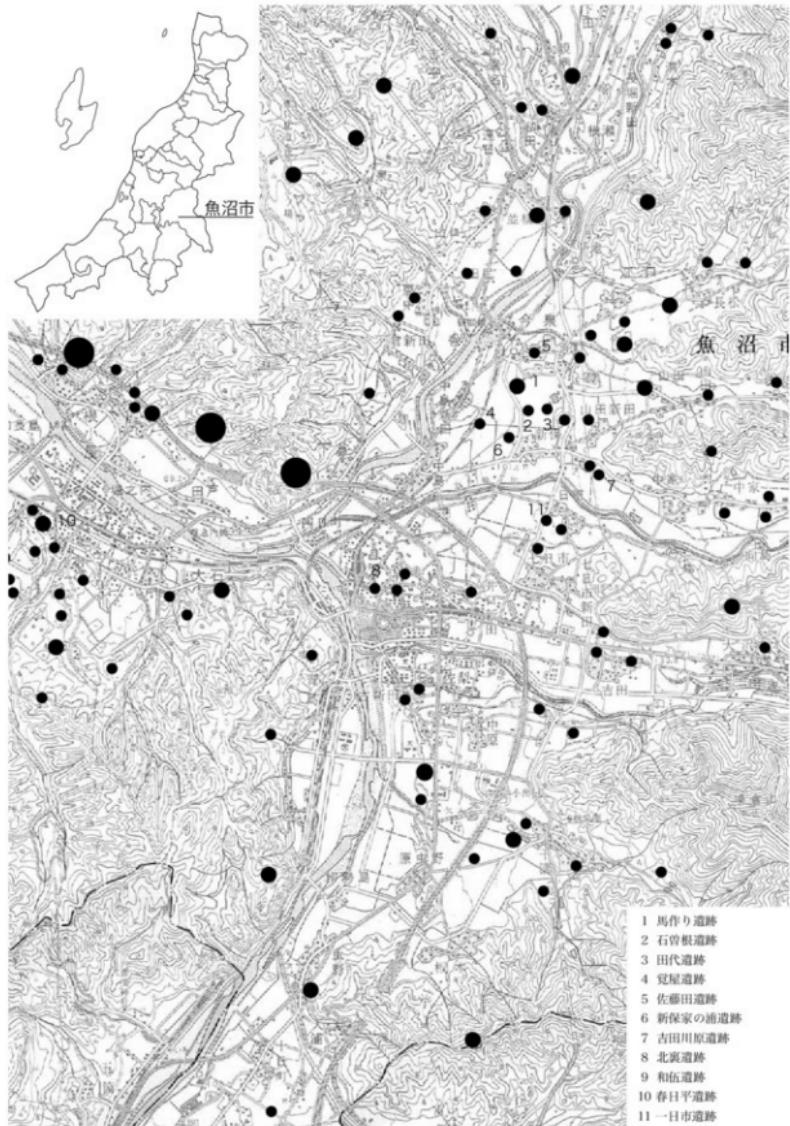
### 2 歴史的環境

#### 古代・中世

『和名類聚抄』には奈良・平安時代において、魚沼市をはじめ魚沼地方は「魚沼郡」と称され、「加賀・那珂・藤上・千屋」の四郷に分れていた。現在もこれらの郷界は必ずしも明らかでなく、史料を裏付ける例もない。当地域では、破間川下流の今泉・中島・新保・一日市付近で発達した自然堤防上に古代遺跡が立地する。石曾根遺跡<sup>2)</sup>・田代遺跡<sup>3)</sup>・佐藤田遺跡<sup>5)</sup>・新保家の浦遺跡<sup>6)</sup>・吉田川原遺跡<sup>7)</sup>などが挙げられ須恵器片・土師器片等が採取されている。春日平遺跡（平成7年度：旧堀之内町）や覚星遺跡（平成10年度）の発掘調査では、堅穴建物や掘立柱建物跡が検出されている。田代遺跡の確認調査では、古墳時代前期の土師器片が出土しており、平安期以前の遺跡が今後発見される可能性がある。

中世では、南魚沼市（旧大和町）から北魚沼郡（小出・広神地区を中心）、小千谷市の一帯まで「藤神」に比定されている。藤神の史料上の初見は、応仁2年（1468年）12月13日の発誓景儀讐状の「魚沼郡内藤神羽川分」（発誓文書）永禄四年（1561）3月11日の長尾景虎徳政令に「上田庄・妻有庄・藤神」とあるように、藤神は中世において荘園ではなく、国衙領であった可能性もある〔堀之内町1995ほか〕。

第2図の範囲内には、中世の遺跡としては居館跡3ヶ所、板碑3ヶ所、塚・塚群8ヶ所、山城10ヶ所、その他2ヶ所計26遺跡ある。一日市遺跡<sup>11)</sup>・板屋敷遺跡等では確認調査により珠洲焼・土師器片・瀬戸美濃焼片が出土している。一日市遺跡では、過去の確認調査、工事立会により、集落跡の一部が確認され、中国青磁、白磁等の破片が出土している。また、中家沖の外発掘の経筒／大永戊子（享禄元年）、北条氏綱が大永7（1527）年に死没した夫人の1周忌の供養のため六十六部信仰に基づき埋納。法華経八巻共に出土している。保存状態から陶器等の容器に入っていたものと推測される。文献史料が僅かにあるものの、今後とも遺跡の調査を進めながら補う必要がある。



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/50000)

### 第III章 馬作り遺跡の概要

#### 1 試掘・確認調査（第3図）

魚沼地域振興局農村整備部の依頼を受けて平成19年11月7～14日の8日間にわたり試掘調査を実施した。19年度は事前の分布調査によって遺物が表採された田圃に絞り試掘トレンチを設定した。次年度も作付け部分ということもあり地権者の同意が少なく、埋め戻し（田の復旧）も考え、幅2m、長さ3m程度の試掘坑を15箇所しか入れられなかった。トレンチ3箇所から平安時代の遺構・遺物が検出された。遺跡名は小字名より「馬作り遺跡」とした[高木2008]。

その後、市道変更や、圃場の形状・向きも変更されることから、工事対象地20haは分割で工事発注され、馬作り遺跡部分の工事着手は22年度に予定変更された。この間に、市教育委員会と新潟県魚沼地域振興局農業振興部と遺跡部分の設計変更ができるか協議を重ねた。最終的に設計変更が困難なことから、本発掘調査の方向で遺跡の広がりの確定や調査面積、調査費の積算も含め追加調査する必要が生じた。

追加の確認調査は平成21年10月13～31日、11月13日に遺跡と「字石曾根」・「字田代」地内を対象として実施した。調査の結果、25・27・35・36Trから遺構・遺物が検出され、特に25Trから極めて多くの遺物が検出された。遺跡は北側にも広がりを確認し、計画上、切土となる水田・市道の一帯1,500m<sup>2</sup>を発掘調査することとした。現況は、水田及び道路である。西側にはJR只見線、国道252号が通る。隣接して石曾根遺跡、田代遺跡が所在する。



第3図 確認調査トレンチ位置図 (S=1/5000)

## 2 発掘調査

### a 調査経過と方法

6月1日からバックホー（コンマ4.5）を入れて表土剥ぎを開始した。確認調査の結果を確認しながら、調査員立会のもと、表土を丁寧に剥がし遺構プランの検出を行った（～11日）。／4日、機材・テント等を搬入する。／7日～作業員の人力により遺構プランを確認した。／8日～委託業者より測量用基準点、グリッド杭の打設を行う（～9日）。／11日～小グリッドを設定し、図化作業を開始する。／15日、遺構プランの確認、写真撮影を行う。堅穴建物1軒、土坑15基前後、ピット70基前後、溝が検出された。大グリッドC1・C2、D1・D2付近に遺構の広がりが確認できた。／17日～大グリッドC1・C2、D1・D2付近の遺構の掘り下げを開始する。

22日、SX03の完掘。遺物出土状況撮影。SK01、ピットの半蔵、大グリッドB0～B3付近の掘削を行う。／25日、SI01・SX01、02の遺構プラン確認、少し全体を掘り下げて、遺物出土状況を把握し、図化を行った。

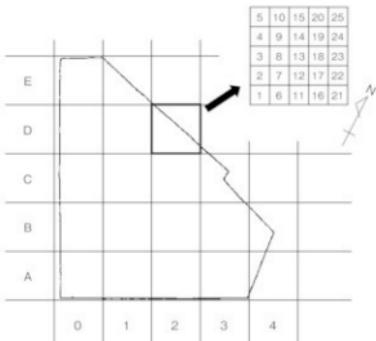
7／1～大グリッドB1～B3、C1・C2を精査し、遺構面を検出する。／6日～SI01周辺（C1～15・20）を精査し、住居の土層断面図等作成。／7日～SX01・02の土層断面図、SX05遺物出土状況図を作成。遺構全体図（1／20）の作成を開始する（～26日）。／16日～調査区西壁（C0～21～D0～25）のセクション図の作成を行う。／23日～SI01内の土坑、柱穴の完掘。／24日～全体のレベリング作業（～27日）／29日に遺跡完掘の写真を撮影して調査は終了した。

**市道部分の調査** 8／23～ 重機で市道部分（大グリッドA0～E0）の掘削を開始する（～26日）。／30日、掘り下げ、精査し遺構面を確認する。9／1、遺構掘り下げ、遺物出土状況撮影。図化作業を行う。（～2日）／3日、完掘写真を撮影して終了した。

### グリッドの設定（第4図）

本遺跡のグリッドは、調査区全域を覆うように南北50m×50mで設定した。グリッドはC2～5（G10）の座標値（国家座標）がX=139012.400・Y=42257.986である。グリッドの傾きは、真北から約29度西傾する。

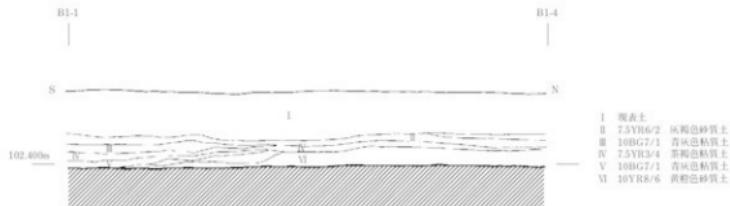
グリッドは、10m方眼を大グリッドとし、さらに大グリッド内を2mごとの小グリッドに25分割したものである。大グリッドの呼称は東西方向を算用数字に、南北方向をアルファベットとし、両者の組合せにより「A1」のように表記した。小グリッドは、1～25の算用数字で表し、南西端を1、北東端を25とし、「A1～15」のように大グリッド表示の後に小グリッドを付けて呼称した。



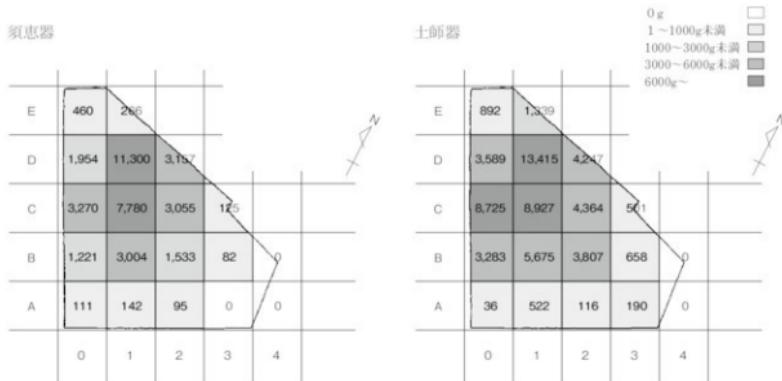
第4図 馬作り遺跡グリッド設定図 (S=1/1000)

## b 基本土層（第5図）

本遺跡の基本土層は、I～VI層に区分される。I層：現表土。II層：7.5YR6/2 灰褐色砂質土 やや粘質、小礫・炭化物の微量に含む。III層：10BG7/1 青灰色粘質土 やや粘質 遺物含む。IV層：7.5YR3/4 茶褐色粘質土 遺物包含層。V層：10BG7/1 青灰色粘砂土 VI層：10YR8/6 黄橙色砂質土 しまり弱 砂・礫を含む。地形は、北から南へ、東から西へ緩やかに傾斜し、微高地を利用して遺跡を形成している。



第5図 基本土層 (S=1/80)



第6図 須恵器・土師器重量別分布図

## 第IV章 遺構

### 1 概要

今回の調査で検出した遺構は、堅穴建物(SI)1軒、掘立柱建物(SB)3棟、土坑(SK)26基、ピット(SP)92基、溝(SD)5条、戸状遺構(○号戸)2基、性格不明遺構(SX)8基であった。これらは出土遺物から、春日真実氏の編年[春日1999]のV2～VII期に属すると考えられる。以下に種別ごとに記述する。なお、土坑・ピットは個々の遺構について記述せず、全体的な傾向について触れるのみとする。

### 2 遺構各説

#### A) 堅穴建物

##### SI01

C1・D1グリッドに位置し、平面形は方形を呈する。建物内にピットが検出されているが、本遺構に伴う柱穴かどうか判断できなかった。また、整理段階で遺構南北両端には、棚状施設[桐生2005]と考えられる段差も確認されている。しかしながら、調査過程での認識が不十分であり、セクション図にも反映されていないため、今回はその可能性だけに留める。

なおカマドについては、調査過程でカマドとしての認識が無かったため、整理段階で判明した事実のみ以下に記述する。それによると、カマドが設けられているのは、建物東側コーナー付近で、礎が散在した状況で検出した。しかし明確に袖石となる礎は確認できず、住居外にも礎が散在しているため、カマドの機能を失い、廃棄した可能性も考えられる。なお、カマド中央部付近には焼土も確認できている。

また、後述するSB01との関連性であるが、本遺構は春日氏の編年のV期に、SB01はVI～VII期に比定できるため、同一時期に構築された遺構とは考えにくい。津南町大割野谷内田B遺跡[佐藤2009]では、堅穴建物と掘立柱建物の連結が想定されているが、本遺跡ではそれには当てはまらない。

#### B) 掘立柱建物

##### SB01

D1グリッドに位置する。建物は桁行3間(6.9m)×梁行1間(5.6m)で、面積は38.53m<sup>2</sup>である。方位はN-45°-Wを指す。柱穴は深いもので、深さ54cmほどであった。柱間寸法は、桁行方向でばらつきが見られ、140～360cmとなっている。なお帰属時期は、先述の通りVI～VII期に当たる。

##### SB02

C1グリッドに位置する。桁行1間(4.0m)×梁行1間(3.4m)で、面積は13.60m<sup>2</sup>である。方位はN-35°-Wを指す。柱穴は深いもので、深さ52cmであった。

##### SB03

C1グリッドに位置する。桁行2間(4.5m)×梁行1間(3.8m)で、面積は17.1m<sup>2</sup>である。方位はN-50°-Wを指す。柱穴は深いもので、深さ52cmであった。また、本遺構の柱穴SP125がSX04を切ついているため、本遺構はSX04よりも新しい時期に構築されたと考えられる。

## C) 土坑・ピット

総数118基を検出した。法量は、長径10~240cm、短径10~144cm、深さ2~60cmを測る。平面形は円形・梢円形・不整形で、断面形は弧状・台形状・漏斗状・階段状であった。ただし断面形は、セクション図を現場で作成したものが少なかったため、一部しか復元できなかつた。そのため、断面形は本遺跡出土の土坑・ピットの傾向を完全に反映しているとは言い難い事を付け加えておく。

また、SK02からは一定量の遺物が出土しているが、そのほとんどが底面からではなく、遺構確認面付近から出土している。

## D) 溝

## SD03

B1・C1グリッドに位置する。後述する畝状遺構を形成する溝よりも幅広なため、畝状遺構と平行して存在しながらも、畝状遺構として扱わなかつた。平均幅は、60cmを測る。

## SD105

C1グリッドに位置する。前述のSD03と連結しているが、新旧関係は不明である。また、SK108に切られているため、SK108よりも帰属時期が古いと考えられる。

本遺構と後述のSD16は他の溝・畝状遺構とは異なり、南西から北東に向かって伸びている。また、SD03との連結により、それらの南東方向・西方向に位置する畝状遺構を区画する溝であった可能性も考えられる。しかしながら、SK108以北にSD105が伸びていくかどうかは現地での確認が不十分であったため不明である。よってここでは、SD03・105が区画溝であるという可能性のみ指摘しておく。

## SD16

D0グリッドに位置し、南西から北東方向に伸びている溝である。SK10・SP14を切っているため、それらの遺構よりも帰属時期が新しい。

## E) 畝状遺構

## 1号畝

B1・C1グリッドに位置している畝状遺構である。該当する個々の遺構は、SD07・SD08・SD09・SD10・SD101・SD102・SD103・SD106・SD107である。これらの溝の主軸は、N-30°-Wで、やや蛇行する溝も存在しながらも、南東から北西に向かって伸びている。また平均深度が6cmと浅いため、検出段階で分断されている溝もある。その点を考慮して、延長線上にある溝は基本的に同じ遺構番号を付した。遺構の切り合い関係は、SD101がSK108に切られているため、本遺構群はSK108よりも古い時期の所産と考えられる。しかしながら、この遺構群からは遺物が全く出土していないため、帰属時期は不明である。

## 2号畝

C0グリッドを中心に位置する遺構である。SD11・SD12・SD13・SD14・SD15がこれにあたる。主軸はN-30°-Wで、平均深度は5cmである。この2点については、1号畝と近似している。また、SD11・SD12がSK06に切られているため、本遺構群はSK06よりも古いと考えられる。しかしながら、出土遺物が無いため、帰属時期は不明である。

## F) 性格不明遺構

SX01

D1グリッドに位置する。平面形は不整形を呈する。遺物がまとまって出土しており、出土レベルは底面に近いものから、遺構確認面付近のものまで様々である。また、中央南寄りからは焼土を2ヶ所検出した。本遺構の所属時期は、出土遺物から春日氏の編年のVI期にあたる。周辺にはVI～VII期にあたるSB01が位置しており、ほぼ同時期に形成された遺構といえる。その場合、本遺構がSB01の内側にくるので、本遺構は建物に関わる施設である可能性がある。なお、出土遺物は須恵器・土師器がほぼ同数出土している。

また、整理段階で現場の完掘写真を見ると、本遺構付近に遺構覆土と思われる黒いシミが確認できた。このシミは本遺構の東側に位置しており、本遺構の形状を含めると堅穴建物であった可能性がある。しかしながら、その部分の掘削を行っていないため、正確なことは言えない。

SX02

D1グリッドに位置する。平面形は不整形を呈する。遺物は一定量出土しており、そのほとんどが土師器である。また遺構内外には礫が散在していたが、この礫の意味するところは現段階では不明である。なお、調査過程で平面図を作成していなかったため、遺構のセクション図は作成できなかった。ただし、遺構内出土遺物と遺構外出土遺物の出土レベルを比較すると、大きく差は見られないので、本遺構はそれほど深さのある遺構とは考えにくい。

SX03

C1・D1グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈し、深さは9cmと非常に浅い。須恵器・土師器がほぼ同数出土しており、出土レベルは底面付近である。なお、この遺構は周辺に存在するピット群に切られているため、ピット群よりも帰属時期が古いと考えられる。

SX04

C1グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈し、深さは5cmと、SX03と同様に浅い。出土遺物は皆無で、帰属時期は不明である。また、SP20・SP125に切られているため、それらの遺構が構成するSB02・SB03よりは時期が古い遺構と考えられる。その他、SD09・SD10との新旧関係は不明である。

SX05

SX03より北のD2グリッドに位置する遺構である。平面形は長楕円形を呈する。深さはSX02同様、調査過程での平面図が存在しない事や、遺構内・遺構外出土遺物の出土レベルがほぼ一定であることから、それほど深くない遺構と考えられる。なお出土遺物は、須恵器が多い。

## 第V章 遺物

### 1 概要

出土した遺物は平箱に47箱である。平安時代の土師器・須恵器が大半を占め、ほかに黒色土器が出土している。出土遺物の総重量は100,040gである。その内訳は土師器59,245g (59.2%)、須恵器39,715g (39.7%)、黒色土器1,080g (1.1%)で、土師器が6割を占める。

### 2 土器

#### A記述の方法

土器は遺構出土のものから記述し、続いて包含層出土のものを記述する。出土位置や法量、色調などの情報は観察表に記載した。調整技法については、以下のように表現を統一した。

ロクロ・回転台等を利用した撫で・削り・ハケをそれぞれ「ロクロナデ」・「ロクロケズリ」・「カキメ」とした。ロクロ・回転台等を利用しない撫で・削り・磨きをそれぞれ「ナデ」・「ケズリ」・「ミガキ」とした。貯蔵具・煮炊具などの外面にみられる叩板を用いた成形痕を「タタキメ」、内面の当て具を用いた成形痕を「当て具痕」とした。

時期区分については、『新潟県の考古学』における春日真実氏の編年〔春日1999〕を基準とし、その後の氏の論考〔春日2005・2007〕も参考にした。

#### B 分類

##### 1) 須恵器

食膳具と貯蔵具に大別できる。食膳具には無台杯・有台杯・杯蓋・有台碗があり、貯蔵具には広口瓶・長頸瓶・壺・四耳壺・甕がある（第7図）。

**無台杯** 杯のうち高台を持たないもの。ロクロナデによって成形される。底部が遺存する個体は少ないと確認できるものでは、回転ヘラ切り後は無調整である。全個体ともに白色小粒子を含むきめ細かい胎土[春日2005]と認識できることから、佐渡小泊窯産と考えられる。口径11～13cmをA類。口径13cm以上をB類とした。

**有台杯** 高台を持つもの。ロクロナデによって成形される。出土数は少ない。底部破片を3点図化した。

無台杯の胎土に近似し、佐渡小泊窯産であろう。

**杯蓋** 破片が3点出土したのみである。佐渡小泊窯産であろう。

**有台碗** 1点のみの出土である。

**広口瓶** 口縁と頸部が1点ずつ出土している。

**長頸瓶** 底部に高台を持ち、胴部上位は振る。頸部は細長く外反して伸び、その下端は広口瓶より細い。

**壺** 口縁部が1個体、底部が2個体出土している。底部からの立ち上がりは急である。全体の様子をつかめないことから壺として一括した。

**四耳壺** 耳のみが出土している。

**甕** 口縁部が外反し、球形の体部を持つもの。胴部は外面にタタキメ、内面に当て具痕が確認できる。口径20cm以下をA類、口径20～35cmをB類、35cm以上をC類とした。

## 2) 土師器

食膳具と煮炊具に大別できる。食膳具には無台椀・有台椀・有台椀・鉢・耳皿があり、煮炊具には小甕・長甕・鍋がある（第7図）。

**無台椀** 高台を持たないものの。底部は大半が回転糸切り後無調整であるが、ロクロケズリ、切り離し後のナデがみられる個体もある。口径、口縁・体部の形状、器高指数（「器高」÷「口径」×100）から細分した。口径は12cm以下をA類、12.1～14.0cmをB類、14.1～17.0cmをC類、17.1cm以上をD類とした。口縁・体部の形状からは、内湾して立ち上がるものをI類、直線的に立ち上がるものをII類、内湾気味に立ち上がり、口縁端部が外反するものをIII類とした。また口縁部から底部まで遺存する個体は、器高指数を測り、32以下を1類、33～36を2類、37～39を3類、40以上を4類とした。本器種はこれらの組み合わせで行った。

**有台椀** 高台を持つもの。1点のみ確認できた。

**鉢** ロクロ成形の鉢である。

**有台鉢** 高台を持つ鉢である。

**耳皿** 小皿の口縁部を耳状にゆがませた箸受けである。1点出土している。

**小甕** 口径17cm以下の甕で、ロクロ成形のものが多い。口縁部の形態、調整技法で分類した。口縁端部が丸いものをA類、口縁端部に面を持つものをB類、口縁端部が受け口状を呈するものをC類とした。ほかに武藏型甕をD類とした。口縁部が「コ」の字状に外反し、体部外面にケズリがみられるものである。

**長甕** 口径17cm以上の甕で、ロクロ成形のものが多い。分類の基準は小甕とほぼ同様である。口縁端部が丸いものをA類、口縁端部に面を持つものをB類、口縁端部をつまみ上げるものをC類、武藏型甕をD類とした。

**鍋** 全体を窓える個体はない。口縁端部の形態で分類した。口縁端部が丸いものをA類、口縁端部をつまみ上げるものをB類とした。

## 3) 黒色土器

**無台椀** 底部付近の体部外面にロクロケズリ、内面にミガキを施す個体が多い。底部は切り離し後、ロクロケズリやナデといった再調整を施す。分類の基準は土師器無台椀と同様である。

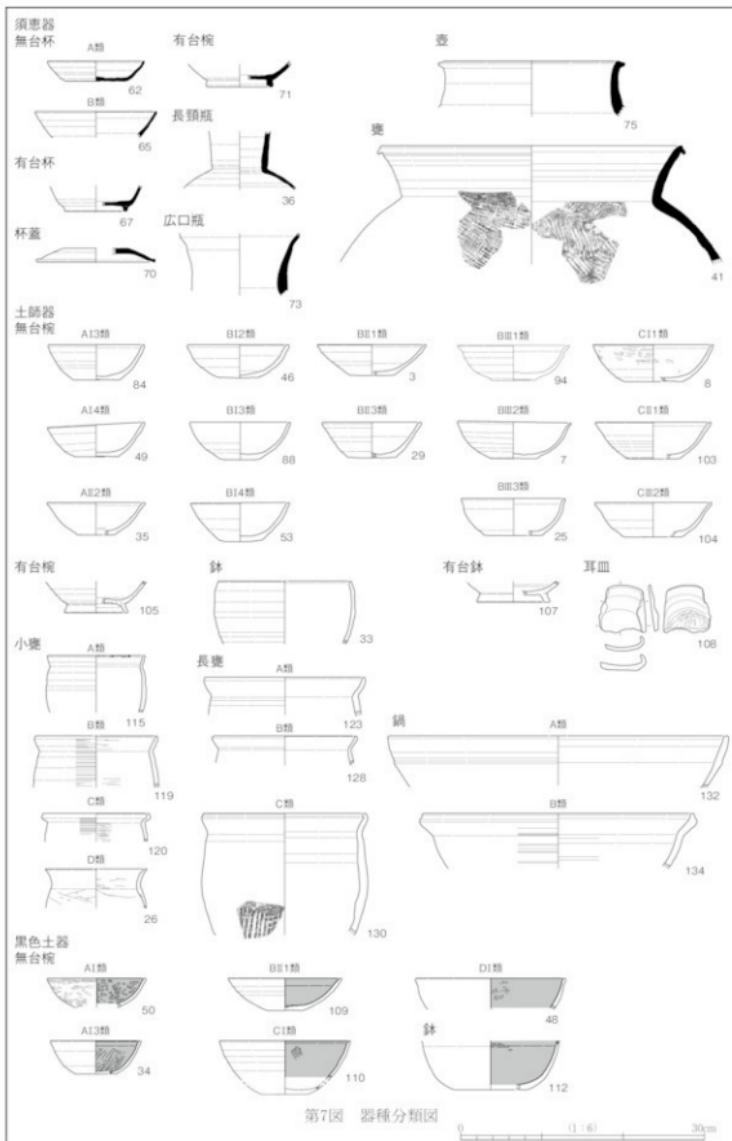
**鉢** 1点出土している。

## 3) 遺物各説

## 1) 遺構出土遺物（図版11～13）

S101（1～11）

須恵器長颈瓶（1）、土師器無台椀（2～8）、小甕（9～11）がある。1は高台につば状の突起がめぐる。胎土から佐渡小泊窯跡群産と推定される。2はB I類。3は浅身で直線的に立ち上がるB II類である。4・5も似た器形でB II類。6はB III類で、やや直線的に立ち上がり、口縁端部は外反する。7はB III 2類である。全体的に薄手で、底部は切り離し後のケズリがみられる。8は体部下半から底部にかけてロクロケズリがみられる。内面に丁寧なミガキがみられる。9はA類で器壁は薄い。いわゆる北信系の小甕である。10はB類で口縁端部は内側につままれて、受け口状を呈する。11はD類である。V 2期に位置付けられよう。



**SB01 (12~17)**

建物を構成するSKO 2から出土した土器を図示した。須恵器有台杯（12）、土師器無台椀（13～15）、長甕（16・17）がある。12は佐渡小泊窯跡群産である。13はB I 3類で底径が小さい。14はB II類、15はB 3類である。16はA類で、器壁は厚い。体部外面にケズリがみられる。17はB類で、口縁部に面を持ち、わずかに内側へつまれる。VI 2期に位置付けられよう。

**SB03 (18)**

建物を構成するP32から出土した土器を図示した。須恵器甕（18）がある。外面に平行タタキ後にナデたような痕跡、内面に同心円当て具痕がみられる。VI～VII期に位置付けられよう。

**SK04 (19)**

須恵器無台杯（19）がある。B類、佐渡小泊窯跡群産である。VI期に位置付けられよう。

**SK06 (20・21)**

土師器無台椀（20・21）がある。20はA III類である。21は体部下半から底部にかけてロクロケズリがみられる。内面に丁寧なミガキがみられる。V 2期に位置付けられよう。

**SX01 (22~27)**

須恵器甕（22）、土師器無台椀（23～25）、小甕（26）、黒色土器無台椀（27）がある。22は佐渡小泊窯跡群産でC類。外面に平行タタキメ、内面に同心円当て具痕がみられる。23はA I類、24はB III類、25は深身で底径が大きい、B III 3類である。26はD類で、外面に斜め方向のケズリ、内面にナデがみられる。器壁は薄く、焼成は良好である。27は体部外面から底部にかけてロクロケズリ、内面に丁寧なミガキがみられる。VI期頃に位置付けられよう。

**SX02 (28~34)**

土師器無台椀（28～31）、長甕（32）、鉢（33）、黒色土器無台椀（34）がある。28はA III類で口縁部がやや厚い。29はB II 3類、30は焼成不良のB III 2類である。31は比較的大振りな作りのC I 4類で内外面にススが付着する。32はA類。33は口縁がやや内湾する鉢である。34は小型の無台椀でA I 3類。体部下半から底部にかけてロクロケズリ、内面に丁寧なミガキがみられる。VI期に位置付けられよう。

**SX03 (35)**

土師器無台椀（35）がある。A III 2類である。

**SX05 (36~42)**

須恵器長頸瓶（36・37）、甕（38～41）、土師器鍋（42）がある。36は体部の器壁は薄手である。37の外面には斜め方向に4条の平行した工具痕がみられる。38・39はA類である。39は外面に自然釉がかかる。40・41はC類である。41は外面に格子タタキメ、内面に平行當て具痕がみられる。須恵器はいずれも佐渡小泊窯跡群産である。42はB類で、外面にコゲがわずかに付着する。VI期に位置付けられよう。

**SX06 (43~45)**

土師器無台椀（43・44）、長甕（45）がある。43はA III類、44はB III類で内面にススが付着する。45はB類である。VI期に位置付けられよう。

**SX07 (46~48)**

土師器無台椀（46・47）、黒色土器無台椀（48）がある。46はB I 2類で器壁はやや厚い。47はB III類で胎土は黒色粒子を多く含む。48は外面にロクロナデ、内面にミガキがみられる。D I類である。VI期頃に位置付けられよう。

## SP01 (49・50)

土師器無台椀 (49)、黒色土器無台椀 (50)がある。49はA I 4類。50はA I 類である。胎土は精良かつ焼成は堅緻、内外面に丁寧なミガキがみられる。VI期に位置付けられよう。

## SP18 (51)

土師器無台椀 (51)がある。B I 3類で底径は小さい。VII期に位置付けられよう。

## SP24 (52)

須恵器無台杯 (52)がある。B類である。

## SP30 (53)

土師器無台椀 (53)がある。B I 3類で底径は小さい。砂を比較的多く含む胎土である。VII期に位置付けられよう。

## SP31 (54)

須恵器長頸瓶 (54)がある。口縁部のみの出土で、全体の器形は窺い知れない。白色粒子を多く含む胎土で、佐渡小泊窯跡群産と推定される。VI～VII期に位置付けられよう。

## 2) 包含層出土遺物 (図版13～16)

## 須恵器 (55～82)

55～65は無台杯で、57～62はA類、63～65はB類である。56は口縁部内面にタールが付着する。59は身が深い。60～62は底部まで残る個体で、回転ヘラ切りの痕跡がみられる。66・67是有台杯である。67は底部外面に墨痕状のシミがわずかに残ることから、転用硯の可能性がある。68～70は杯蓋である。70は内面に墨痕があり、よく磨かれている。転用硯である。71是有台椀である。以上の食器具はいずれも佐渡小泊窯跡群産である。72・73は広口瓶である。72は口縁部で外面に自然釉がかかる。73は頸部である。胎土から頸城平野東部産の可能性がある。74は長頸瓶である。体部外面に浅い沈線がめぐる。佐渡小泊窯跡群産である。75～77は盞である。75は直立気味な口縁部から盞とした。77は体部外面に平行タキメがみられる。砂質が強い胎土から、浜海川流域産と推定される。突帶付四耳盞の可能性がある。78は四耳盞の耳で、指オサエの痕跡が明瞭に残る。79～82は甕である。79・80はA類、81・82はC類である。81は外側に自然釉がかかる。

## 土師器 (83～136)

83～104は無台椀である。83はA I 類、84はA I 3類、85・86はA III 類、87はB I 2類、88はB I 3類、89・90はB II 類、91はB II 1類、92・93はB II 類、94はB III 1類、95～98はB III 2類、99・100はB III 3類、101・102はB III 類、103はC II 1類、104はC III 2類である。84は底部切り離し後のナデがみられる。90は焼成不良。91は口縁端部がわずかに外反する。92は体部から口縁にかけて徐々に肥厚する。94・102は口縁端部が強く外反する。104は底径が大きく、作りが粗雑である。105是有台椀である。高台を貼り付け、調整した痕跡がみられる。106・107是有台鉢である。106は脚の高い高台、107は太く低い高台を持つ。108は耳皿である。内外面はナデ、底部はケズリ調整される。109～111は黒色土器無台椀である。109はB II 1類、110はC I 類である。109は器高が低く、底径が小さい。作りは粗雑である。110は体部下底部にかけてロクロケズリ、内面に丁寧なミガキがみられる。111は110と同様の調整だが、底部内面を中心とする放射状のミガキがみられる。112は黒色土器鉢である。遺存状態は良くないが、内面に横方向のミガキがみられる。113～121は小甕である。113～117はA類、118・119はB類、120はC類、121はD類であ

る。113は北信系で口縁内面にススが付着する。115もいわゆる北信系である。熱によるものか外面は剥離し、口縁内部にコゲが付着する。117は丸みを帯びる体部を持つ。118・119は北陸系小甕である。119は器壁がやや厚く、口縁端部に面を持つ。120は口縁部が著しく屈曲し、受け口状を呈する。121は体部外面に斜め方向のケズリがみられる。胎土は精良。122～130は長甕である。122～126はA類。127・128はB類。129・130はC類である。122は壺に近い器形を持つ。123は口縁端部がわずかに内湾する。北信系である。125は口縁が肥厚する。頸部のくびれが弱い器形を呈すると考えられる。126は体部外面に縱方向のケズリ、口縁部外面から内面にナデがみられる。器壁は厚く、胎土は緻密である。128は北陸系で、口縁端部がわずかに内湾する。129は口縁端部がわずかにつまみあげられ、尖る。130は体部外面に平行タタキメの痕跡がみられる。口縁端部は粗雑につまみあげられる。131～136は鍋である。131・132はA類、133～136はB類である。131は体部外面にケズリがみられる。132はくびれがない器形で、外面にコゲが付着する。134・135は口縁端部が上方向につまみあげられる。136は体部外面に平行タタキメの痕跡がみられる。

## 第VI章　まとめ

### 1　遺物について

馬作り遺跡から出土した遺物は、土師器・須恵器・黒色土器である。大半は土師器・須恵器で占められる。須恵器はそのほとんどを佐渡小泊窯産が占め、ほかに頸城平野東部、淡海川流域産などが数点あるにすぎない。遺物は春日編年〔春日1999〕のV2期～VI1期（9世紀中葉～10世紀前葉）に比定できる。

本遺跡出土土器全点に対し、口縁部残存率計測法〔宇野1992〕を用いて、機能別構成比率・食膳具構成比率を算出し（第1表）、グラフ化したものが第8図である。出土状況が比較的良好な遺構（S I O 1・S X O 1・O 2）を抽出して計測しているが、遺物の大半は包含層からの出土である。この計測法を用いた結果の個体総計は110,2個体（3967/36）を数える。遺跡全体の機能別構成比率は食膳具88.6%・煮炊具8.7%・貯蔵具2.7%を示し、食膳具が約9割を占める。さらに、食膳具構成比率は土師器94.7%・須恵器3.1%・黒色土器2.2%を示す。VI期と考えられるS X O 2は黒色土器が少量認められる。のことから、食膳具の大部分には土師器無台椀が当たられ、ごくわずかな須恵器無台杯と黒色土器が補完するということが読み取れる。本遺跡とほぼ併行関係にあり、9世紀後半から10世紀前半に廃絶したとされる津南町大割野谷内田B遺跡〔佐藤2009〕の堅穴建物出土の食膳具は土師器85%・須恵器15%の比率を示す。また、9世紀中葉とされる魚沼市（旧広神村）覚屋遺跡〔池田・高木2001〕S I - 01出土土器は土師器が89.6%を占めている。本遺跡の構成比率もこれらと同様、土師器が他を凌駕する。魚沼地方の集落遺跡においては、食膳具は土師器椀が主体をなし、佐渡小泊窯産須恵器・黒色土器が少量伴うといえよう。

出土土器の特徴について簡単にふれたい。食膳具は、少量ではあるが佐渡小泊窯産須恵器の搬入がある。約95%を占める土師器無台椀は、口径12～12.8cm、器高4～4.6cmにまとまりを見出すことができ、概して小型のものが多い傾向にある（第9図）。煮炊具では、土師器長甕・小甕の多様化がみられる。十日町市谷地A遺跡〔菅沼2000〕では、春日編年VI2期に北陸型・佐渡型・北信型・武藏型の4系統の出土が確認されている。本遺跡において佐渡型は認められないが、他の3系統が出土し、その多様性が窺える。なお、本遺跡類似資料は南魚沼市（旧六日町）金屋遺跡〔山本1985〕に求めることができる。

魚沼地方において、本遺跡と同時代の集落遺跡の発見例は少数であることから、その様相は判然としないのが現状である。さらなる類例が待たれる。

### 2　馬作り遺跡における集落構成

馬作り遺跡で検出された遺構は、一部のピットを除き、旧河川跡より北側で検出された。その北側の遺構集中域についても、居住域と生産域とに分離することが出来る。

まず居住域は、C1～5グリッド以北が相当する。本区域は、堅穴建物1軒・掘立柱建物1棟・その他土坑・ピット等が分布している。第IV章で述べた通り、S X O 1付近が堅穴建物になる可能性は充分に有り、またピット等の存在から、堅穴建物・掘立柱建物が潜在的に存在する可能性が考えられる。

生産域は、A0～C1～24グリッド以南を中心とした区域に求めることが出来る。ここは畝状遺構が2基検出されており、農地と考えられる区域である。ただし、本区域からも掘立柱建物が2棟検出されている。

種類	器種	全体		SI01		SX01		SX02	
		個体数	比率	個体数	比率	個体数	比率	個体数	比率
土師器	無台椀	91.93	83.46	483	87.44	0.92	48.53	3.81	91.95
	鉢	0.47	0.43	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
内黒	無台椀	204	1.85	0.00	0.00	0.00	0.00	0.10	2.35
	鉢	0.14	0.13	0.00	0.00	0.00	0.00	0.11	268
須恵器	杯	232	2.11	0.00	0.00	0.08	4.41	0.00	0.00
	杯蓋	0.69	0.63	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
食器具計		97.59	88.61	483	87.44	1.00	52.94	4.02	96.98
土師器	長甕	550	4.99	0.17	3.02	0.17	8.82	0.13	3.02
	小甕	272	2.47	0.42	7.54	0.03	1.47	0.00	0.00
	鍋	1.39	1.26	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	その他	0.00	0.00	0.11	2.01	0.00	0.00	0.00	0.00
煮炊具計		9.61	8.72	0.70	12.57	0.20	10.29	0.13	3.02
須恵器	甕	213	1.93	0.00	0.00	0.69	36.76	0.00	0.00
	甕・瓶	0.82	0.74	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
貯藏具計		2.95	2.67	0.00	0.00	0.69	36.76	0.00	0.00
総計		110.15	100.00	5.53	100.01	1.89	99.99	4.15	100.00

第1表 機能別構成比率

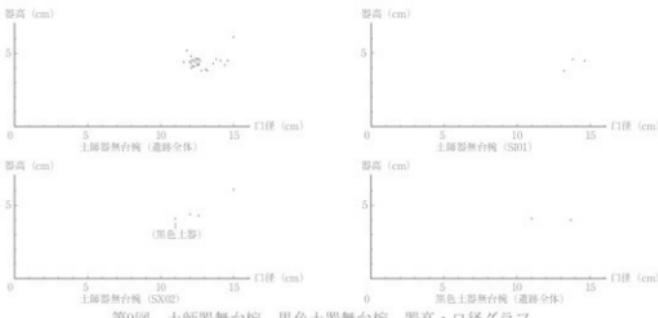
機能別構成比率



食器具の器種別構成比率



第8図 機能別・食器具の器種別構成比率



畝状遺構の帰属時期が不明なため、掘立柱建物との時期の対比は出来ないが、畝状遺構の上に建物を設営するとは考えにくいので、少なくともこの両者は時期が異なるものと考えられる。

以上のように、本調査区の居住域と生産域について概観してきた。また、遺構集中区よりも東側、旧河川跡よりも南側では、ほとんど遺構を検出できなかった。そのため、本調査区は遺跡の東縁・南縁と考えられる。

## 要 約

- 1 馬作り遺跡は、新潟県魚沼市今泉字馬作り1723番地2ほかに所在する。破間川の左岸、標高約102mに所在する。
- 2 調査は、県営担い手育成基盤整備事業（今泉地区）に伴い、平成22年6月1日～9月3日にかけて実施した。調査面積は1,500m<sup>2</sup>である。
- 3 遺構は、堅穴建物1軒、掘立柱建物3棟、土坑26基、ピット92基、溝5条、畝状遺構2基、性格不明遺構8基を検出した。これらの遺構は、出土遺物から9世紀中葉～10世紀前半に位置づけられる。また、遺構の配置から、居住域と生産域に分離することができる。
- 4 遺物は古代の須恵器、土師器などが出土した。時期は9世紀中葉から10世紀前半である。特に堅穴建物から良好な資料が出土した。
- 5 今回調査した地点は、平安時代の集落の南・東側縁辺部と考えられる。

## 引用・参考文献

- 池田亨・高木公輔 2001 『広神村埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集 覚屋遺跡発掘調査報告書』  
広神村教育委員会
- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館 研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
- 春日真実 1999 「第4章 第2節 土器編年と地城性」『新潟県の考古学』 高志書院
- 春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について -「今池編年」・「下之西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に-」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 春日真実 2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第18号 新潟県考古学会
- 桐生直彦 2005 『竈を持つ堅穴建物跡の研究』 六一書房
- 佐藤雅一 2009 『津南町文化財報告 第53輯 大割野谷内田A遺跡・大割野谷内田B遺跡』 津南町教育委員会
- 菅沼 直ほか 2000 『十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第17集 谷内A遺跡・中新田A遺跡・中新田B遺跡・廿日城東遺跡』 十日町市教育委員会
- 高木公輔 2008 『魚沼市埋蔵文化財調査報告第4集 平成19年度埋蔵文化財確認調査報告書』 魚沼市教育委員会  
2010 『魚沼市埋蔵文化財調査報告第7集 平成20・21年度埋蔵文化財確認調査報告書』 魚沼市教育委員会
- 山本 雄ほか 1985 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第37 金星遺跡』 新潟県教育委員会

## 遺構観察表

## 遺構観察表

## 柱穴遺物

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
S101	C1-10・15 D1 6・11	方形	弧状	294	288	12	1-11	カマド廢棄か?

## 掘立柱建物

S801

グリッド	D1	桁行(n)	3間 6.9	梁間(m)	1間 5.6	面積	38.53m <sup>2</sup>	方位	N-45°-W
柱穴番号	平面形	断面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物		備考	
S802	不整形	弧状	128	121	16	12-17			
SP99	円形	U字状	50	40	9				
SP17	円形	楕斗状	50	44	54				
SP131	円形	U字状	40	36	23				
SP132	円形	U字状	28	22	21				
SP154	円形	U字状	36	36	41				
SP155	梢円形	弧状	78	64	24				
SP156	梢円形	弧状	80	64	24				

S802

グリッド	C1	桁行(n)	1間 4.0	梁間(m)	1間 3.4	面積	13.60m <sup>2</sup>	方位	N-35°-W
柱穴番号	平面形	断面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物		備考	
SP20	円形	弧状	50	38	26				
SP21	梢円形	U字状	54	40	42				
SP26	円形	U字状	46	46	52				
SP107	円形	U字状	32	28	41				

S803

グリッド	C1	桁行(n)	2間 4.5	梁間(m)	1間 3.8	面積	17.10m <sup>2</sup>	方位	N-50°-W
柱穴番号	平面形	断面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物		備考	
SP28	円形	弧状	40	38	39				
SP29	円形	階段状	44	44	14				
SP32	円形	U字状	46	44	52	18			
SP123	円形	U字状	44	40	24				
SP125	円形	台形状	46	40	25				

十帳

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
S802	B1-13	不整形	弧状	128	121	16	12-17	
S804	B0-24・25	円形	弧状	(104)	(46)	(12)	19	
S806	C0-10 D0-6	円形	台形状	138	137	21	20・21	

## ピット

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
S801	E9-25	梢円形	階段状	48	36		49・50	
SP13	D1-7	梢円形	台形状	66	52	33		
SP14	D1-7	梢円形	階段状	72	52	20		
SP17	D1-16	円形	楕斗状	59	44	54		
SP21	C1-8	梢円形	弧状	54	40	42		
SP24	C1-6・7	円形	弧状	58	58	23	52	
SP26	C1-16	円形	弧状	46	46	52		
SP27	C1-17	円形	台形状	38	40	53		
SP30	C1-22	円形	台形状	42	38	28	53	
SP31	C1-23	円形	台形状	36	36	34	54	
SP32	C1-16	円形	弧状	46	44	52	18	
SP43	D0-8	円形	台形状	32	32	19		

溝

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
S803	B1・C1	-	台形状	-	60	5		
SD16	D0	-	台形状	-	30	5		
SD105	C1	-	台形状	-	60	7		

## 1号跡

グリッド	B1・C1	方位	N-30°-W
遺構番号	断面形	幅(cm)	深さ(cm)
SD07	管形状	24	5
SD08	管形状	30	6
SD09	管形状	40	15
SD10	管形状	24	5
SD11	-	50	4
SD12	-	50	5
SD103	-	24	5
SD106	-	30	5
SD107	-	22	5

## 2号跡

グリッド	B0・C0	方位	N-30°-W
遺構番号	断面形	幅(cm)	深さ(cm)
SD91	管形状	60	7
SD92	管形状	20	5
SD93	管形状	20	4
SD94	管形状	24	6
SD95	管形状	36	6

## 性格不明遺構

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
S301	D1-3・4	不整形	弧状	480	230	9	22・27	
S302	D1-18・19	不整形	-	570	206	-	28・34	
S303	C1-24・25	梢円形	弧状	420	94	9	35	
S304	C1-18・19	梢円形	弧状	326	160	5		
S305	D0-1・2	梢円形	-	364	140	-	36・42	

觀察物(1)

植物觀察表(2)

遺物觀察表(3)

遺物番号	出土位置	遺物	遺量 (cm)		外觀	色調	測量		外觀	色調	測量 (cm)		外觀	色調
			(幅)	(高)			(幅)	(高)			(幅)	(高)		
31 21-23	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	4.3	0.25	手鉗	鐵質	4.2	0.25	手鉗	鐵質
34 29-30	IV	手鉗	0.11	0.13	手鉗	鐵質	4.3	0.27	手鉗	鐵質	4.3	0.27	手鉗	鐵質
95 21-24	IV, V*	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
96 21-24	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	4.3	0.27	手鉗	鐵質	4.3	0.27	手鉗	鐵質
97 20-21	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
98 21-22	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
99 21-19	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
100 21-23	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
101 20-21	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
102 20-21	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
103 20-21	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
104 20-21	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
105 21-22	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
106 20-21	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
107 20-21	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
108 21-24	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
109 21-22	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
110 21-21, 12	IV	內鉗	0.18	0.13	內鉗	鐵質	12.1	5.2	內鉗	鐵質	12.1	5.2	內鉗	鐵質
111 21-24	IV	內鉗	0.18	0.13	內鉗	鐵質	12.1	5.4	內鉗	鐵質	12.1	5.4	內鉗	鐵質
112 21-11	IV	內鉗	0.18	0.13	內鉗	鐵質	12.1	5.2	內鉗	鐵質	12.1	5.2	內鉗	鐵質
113 20-19	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
114 21-21	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
115 20-20	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
116 20-21	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
117 21-15	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
118 21-11	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
119 21-23	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
120 21-21	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
121 21-20	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
122 20-22, 24	III	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
123 22	III	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
124 22-19	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
125 20-21	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
126 20-23	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
127 20-20	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
128 22	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
129 20-22	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
130 21-16	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
131 20-14	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
132 20-23	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
133 20-19	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
134 20-22	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質
135 20-23, 25	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質	12.1	5.4	手鉗	鐵質
136 20-19	IV	手鉗	0.18	0.13	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質	12.1	5.2	手鉗	鐵質

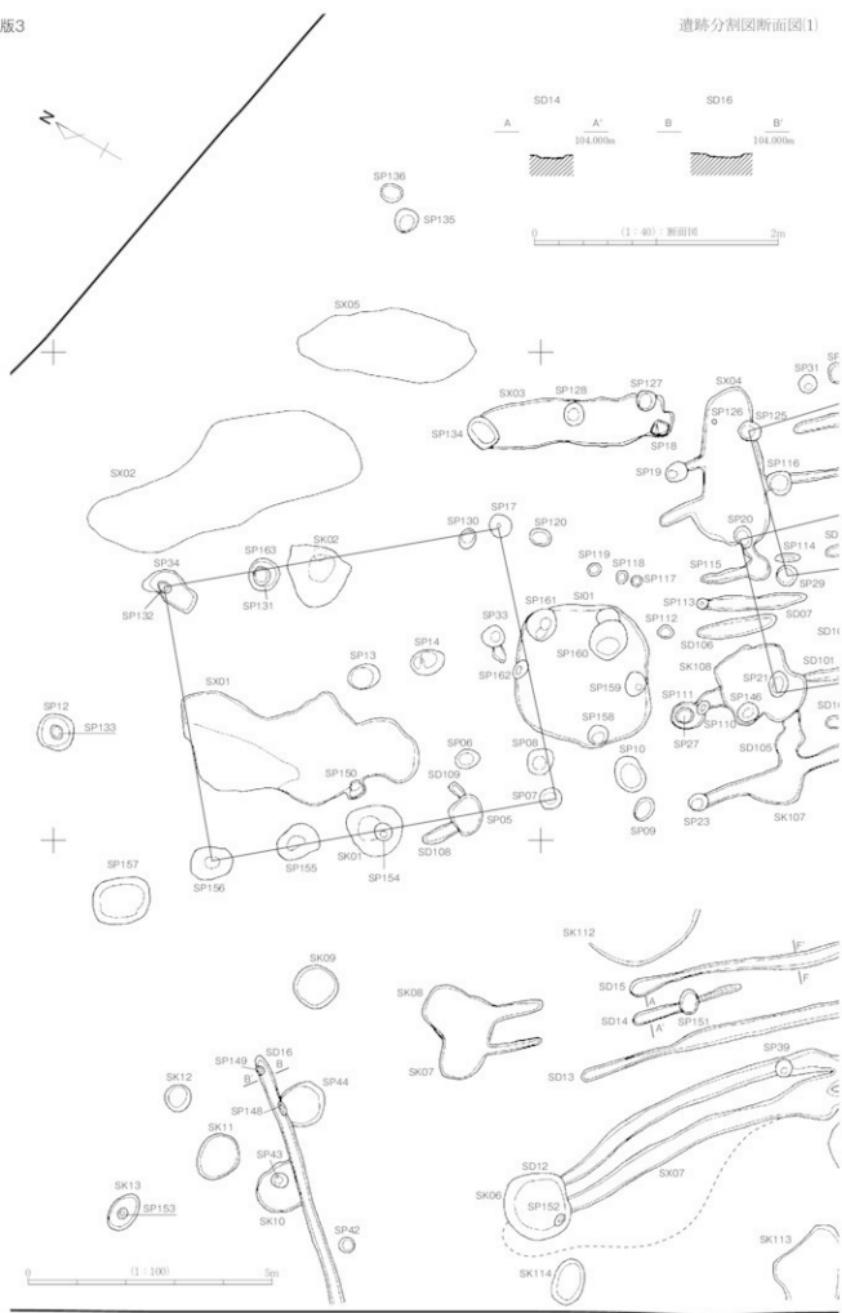




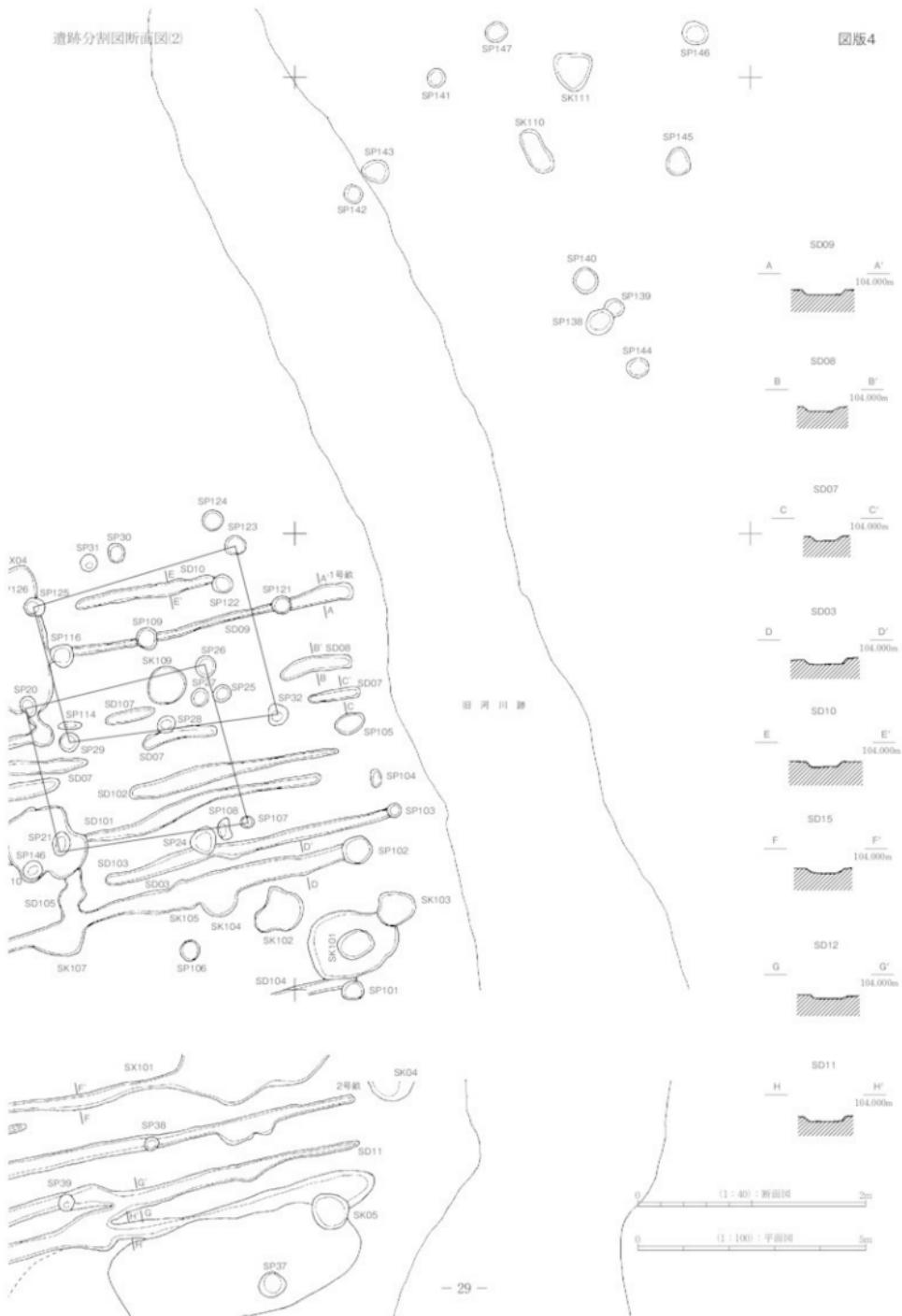


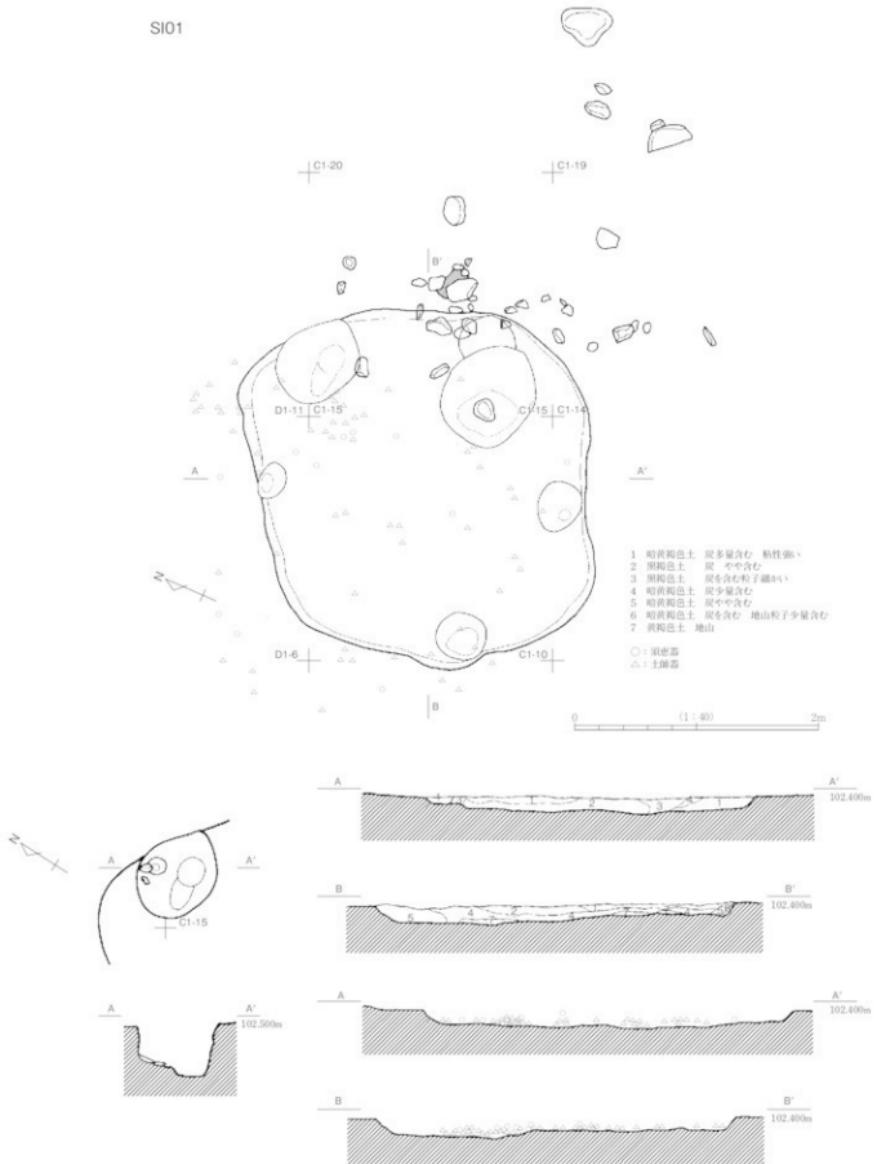
圖版3

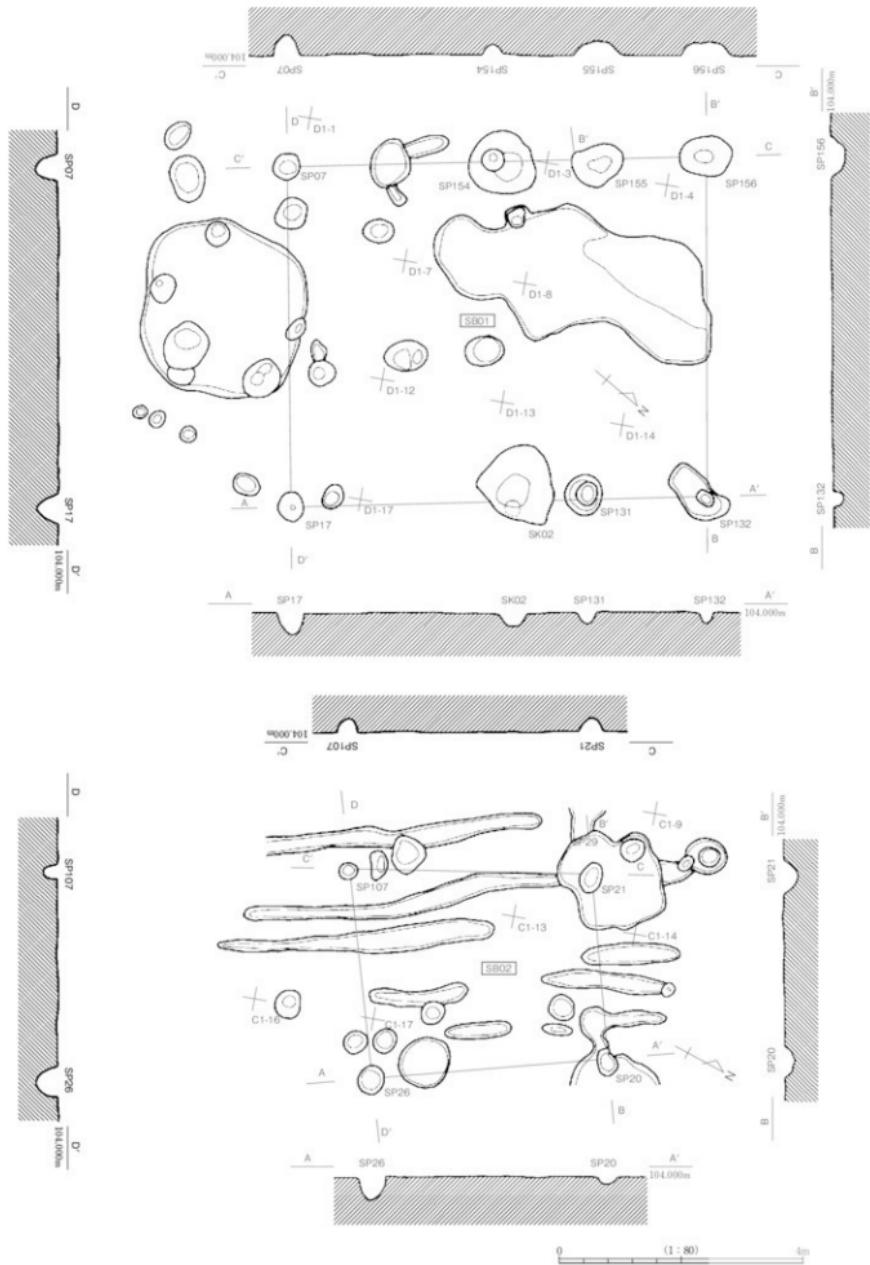
遺跡分割図断面図(1)

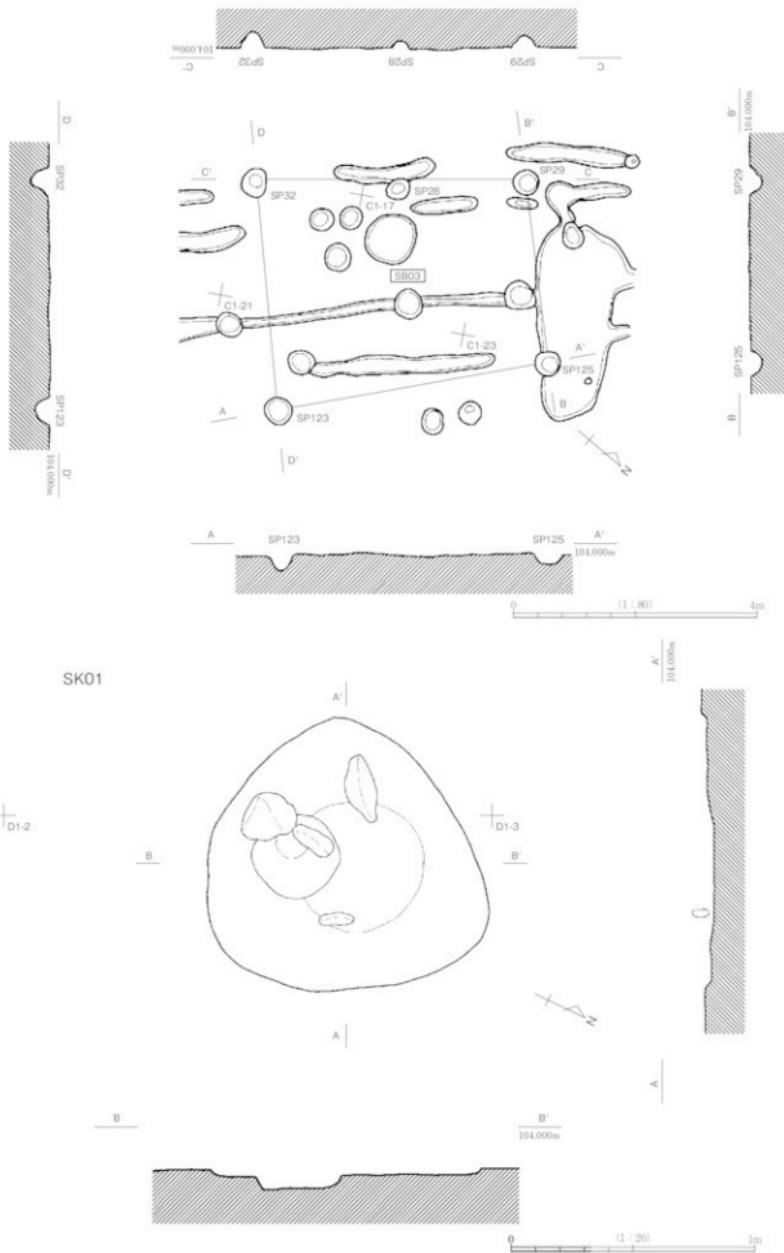


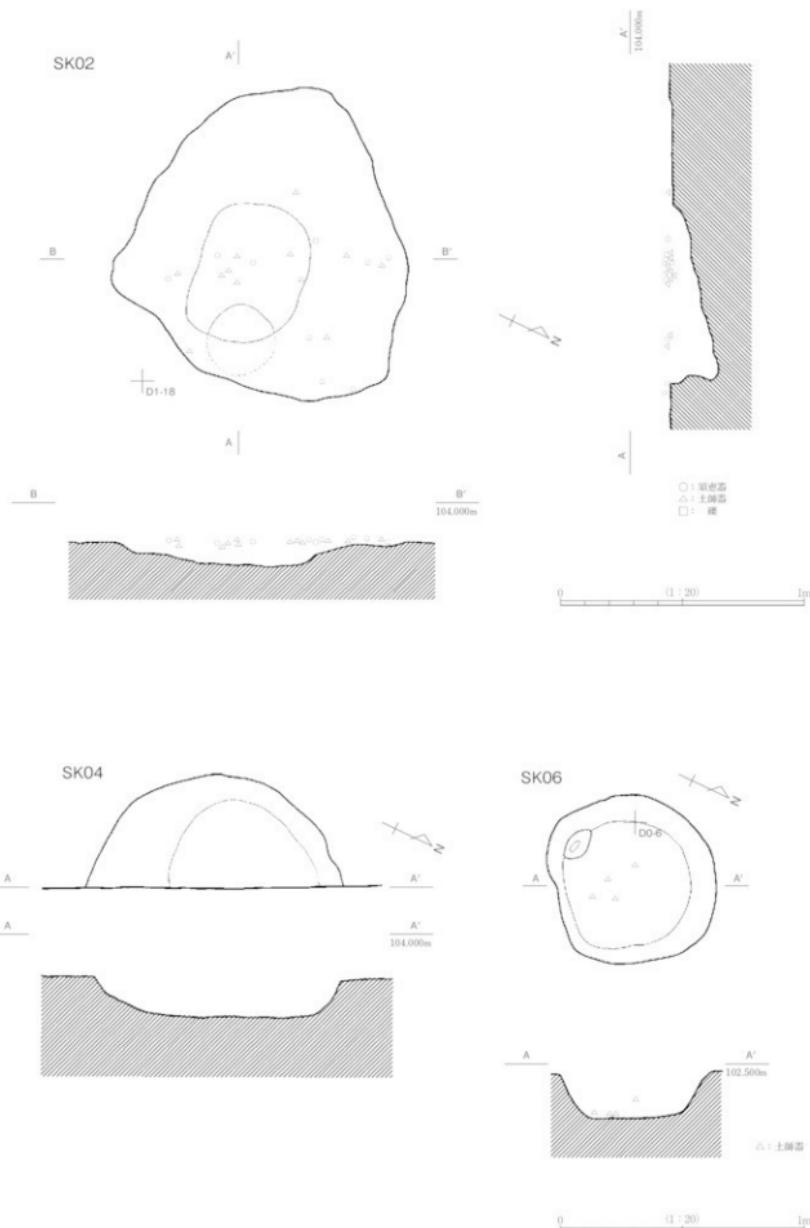
遺跡分割断面図(2)

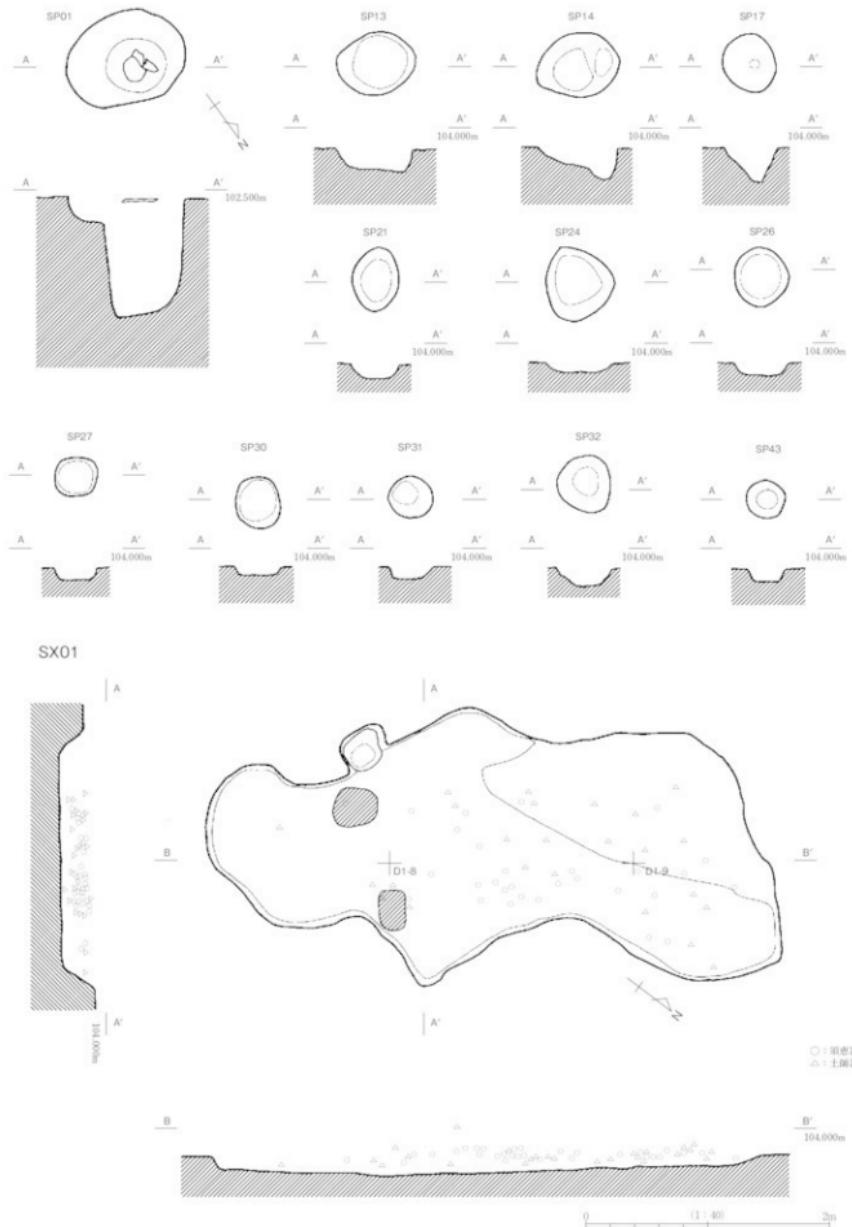




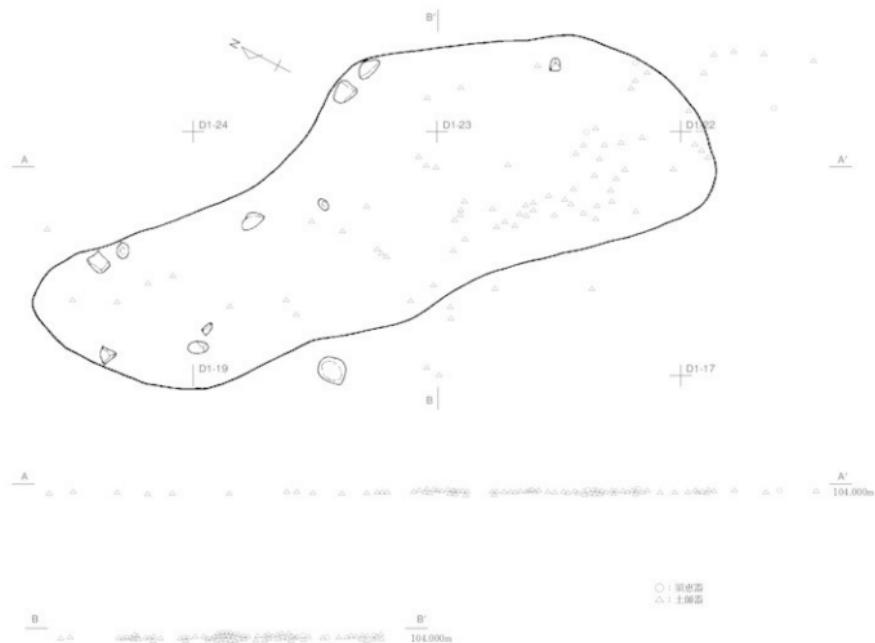




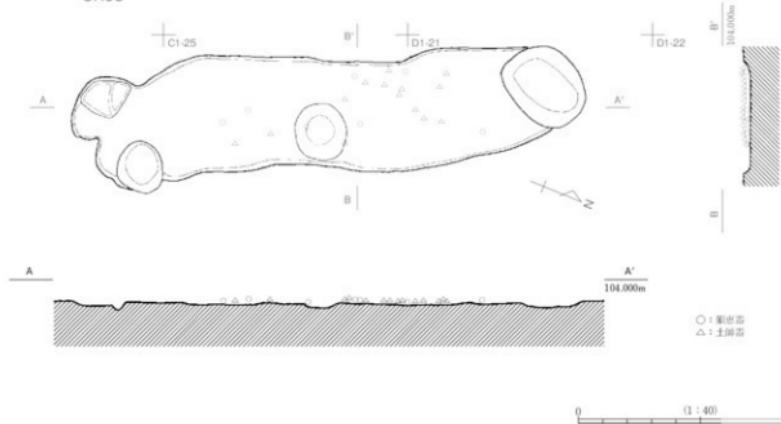




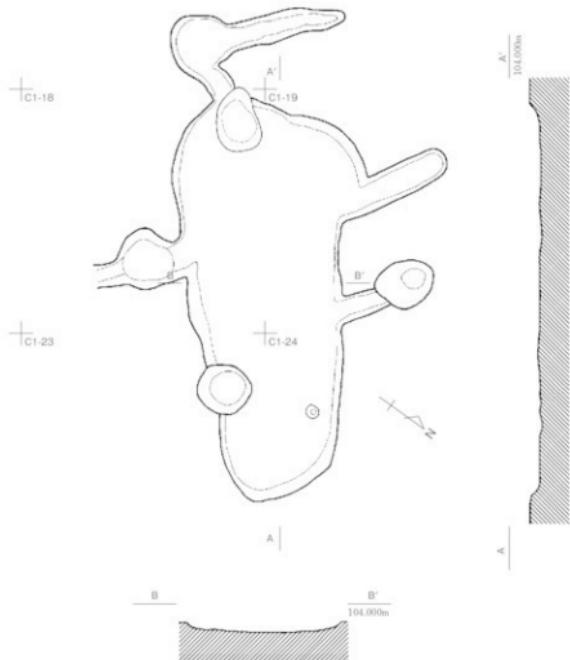
SX02



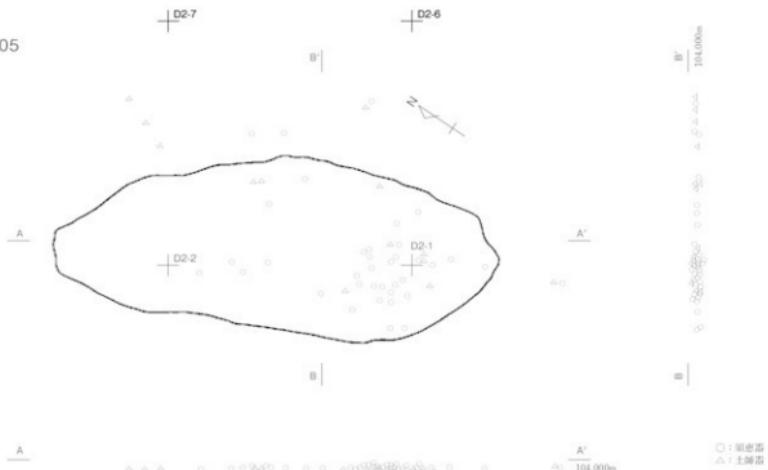
SX03

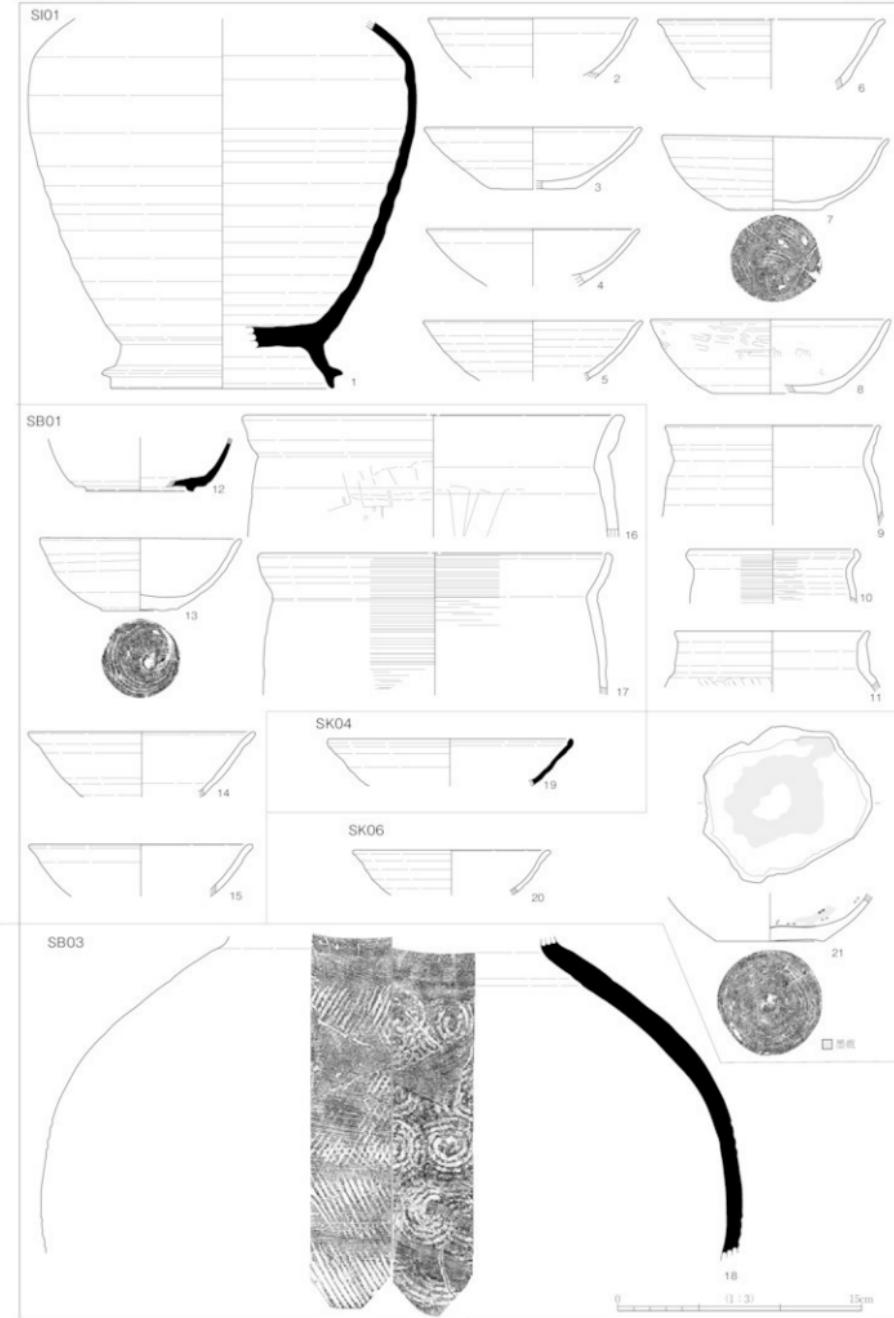


SX04

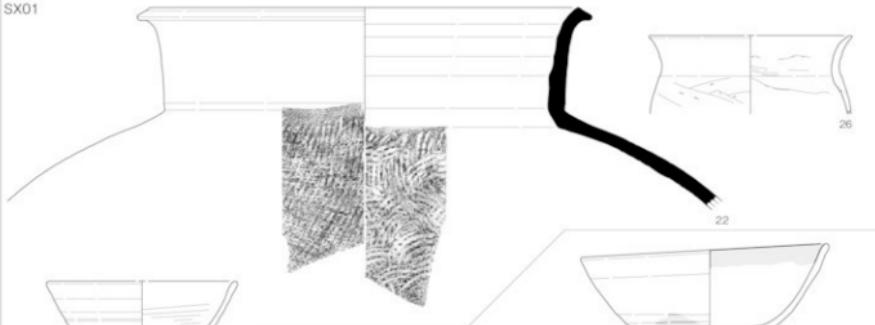


SX05

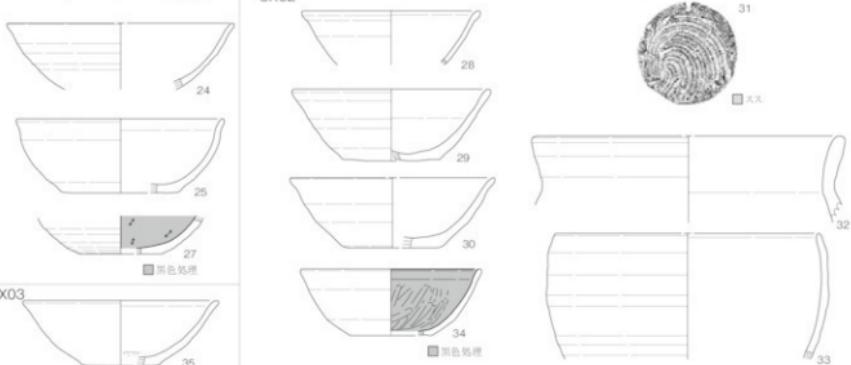




SX01



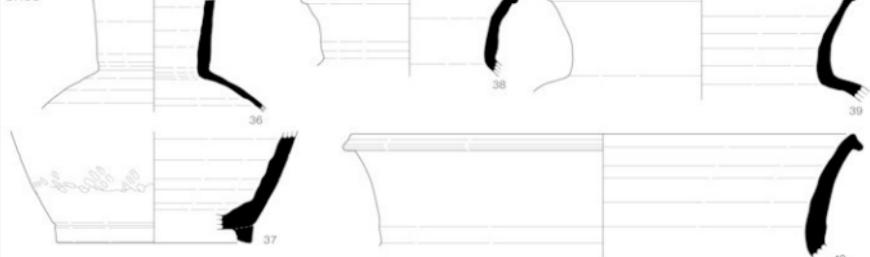
SX02



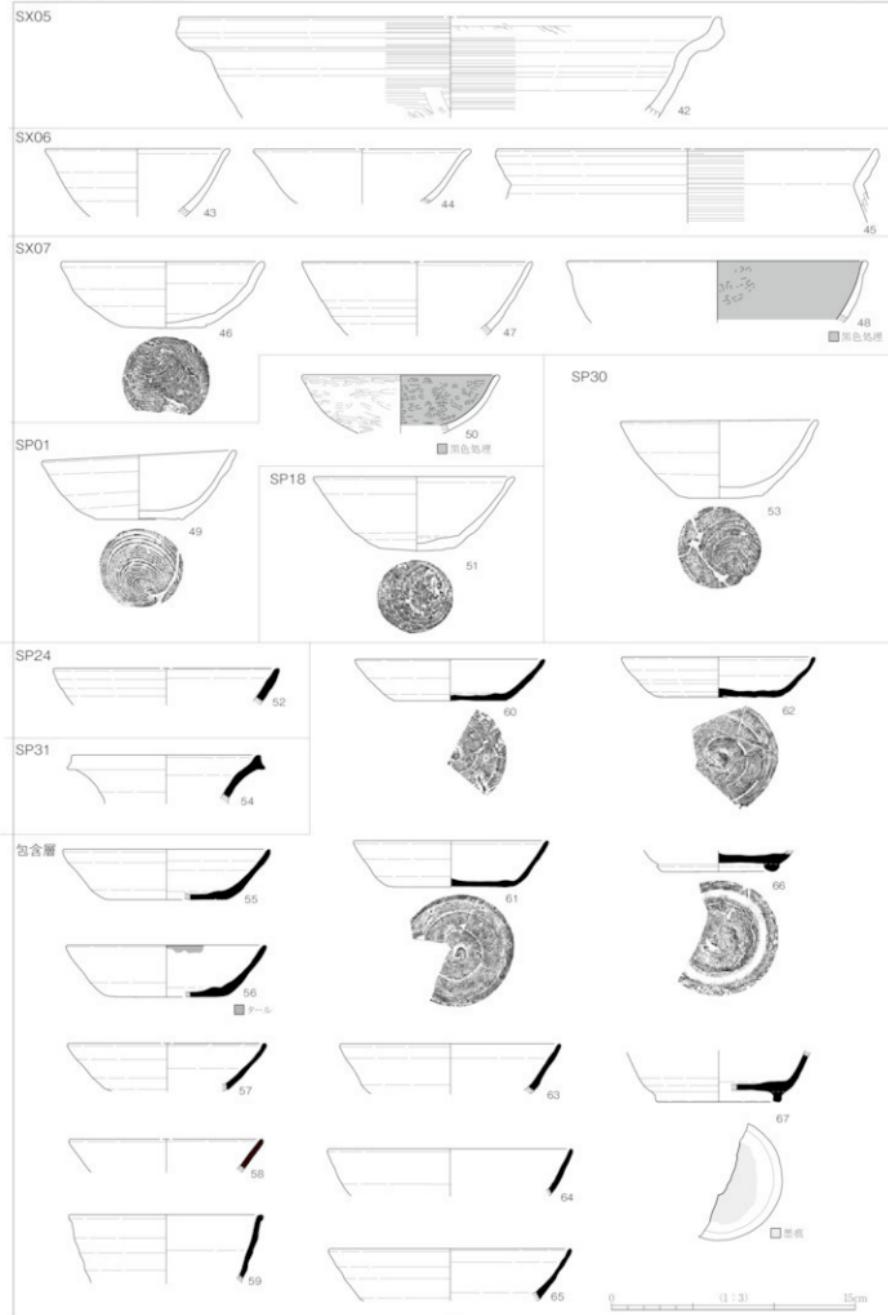
SX03

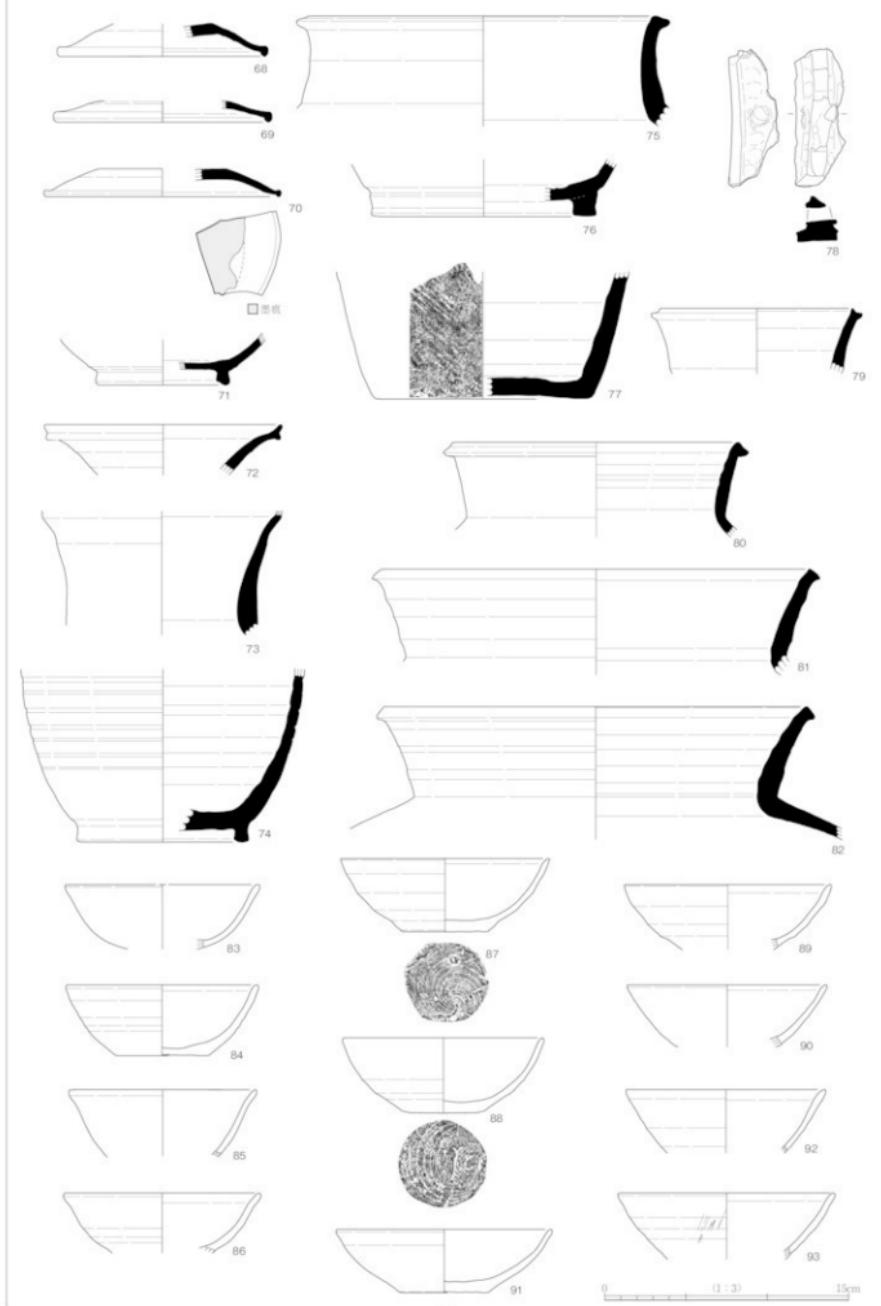


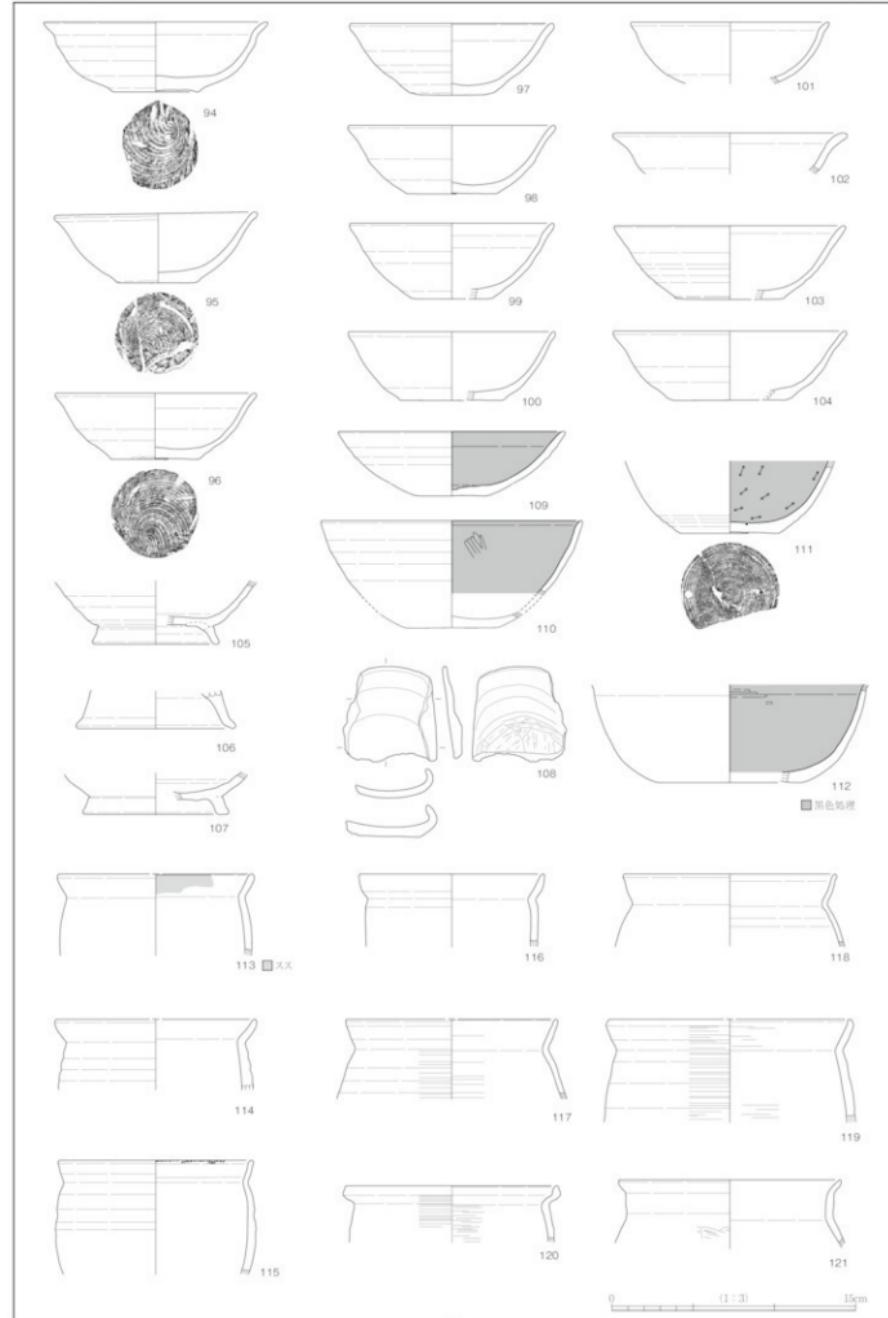
SX05

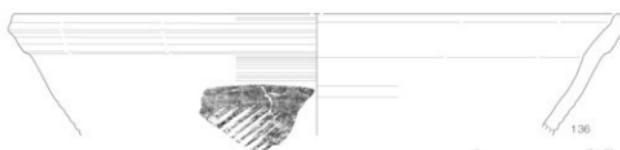
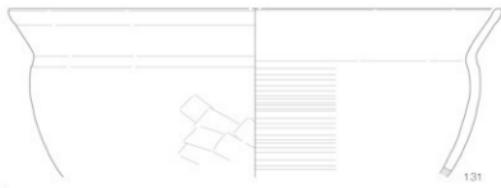
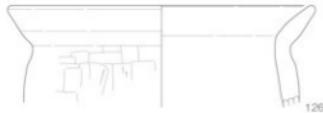
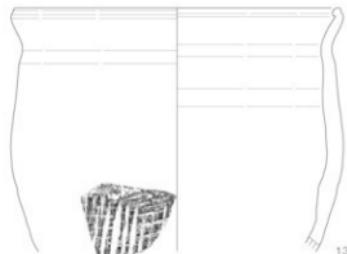
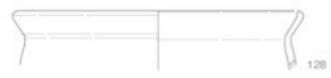


0 (1:3) 15cm









0 (1 : 3) 15cm

## 報告書抄録

ふりがな	うまづくりいせき							
書名	馬作り遺跡							
副書名	—県営圃場整備事業（今泉地区）に伴う埋蔵文化財確認調査報告書—							
巻次								
シリーズ名	魚沼市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号編	第8集							
編著者名	高木 公輔 桑原 健 伊藤 正志							
編集機関	魚沼市教育委員会 練吉田建設							
所在地	〒949-7494 新潟県魚沼市堀之内130番地							
発行年月日	西暦 2012年3月9日							
所取遺跡 ふりがな 所在地			北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
								市町村
うまづくりいせき 馬作り遺跡	日本海側今泉のましいせいあとうまづくり 新潟県魚沼市今泉字馬作り	152251	277	37度 15分 08秒	138度 58分 34秒	20100601～ 20100903	1,500m <sup>2</sup>	県営圃場整備事業に伴う本发掘調査
所取遺跡名	種別	時期	主な遺構		主な遺物	特記事項		
馬作り遺跡	集落跡	平安時代	竪穴建物1軒、掘立柱建物3棟 土坑26基、ピット92基、溝5条 畝状遺構2基 性格不明遺構8基		土師器片29箱 須恵器片18箱		9C中葉～10C前半の 集落跡	

